

固有名の指示

固有名詞に関する記述理論と因果理論の相違

The Reference of Proper Names

The difference between the description theory and the causal theory concerning proper nouns

村 越 行 雄

要 旨

固有名の指示に関する代表的な理論とされている記述理論と因果理論の特徴と相違を検討することにより、具体的には Frege の記述理論、Searle の記述理論、そして Kripke の因果理論の比較検討を通して、固有名が抱える問題を浮き彫りにし、固有名に対する意味と指示の関係を明確にすることが、固有名の指示を理解する上で必要となる。ある特定の、単一の性質あるいは確定記述が、固有名の意味を成すと同時に、固有名の指示を決定するとする Frege、その Frege に矛盾を感じ、「群れ」概念の導入によって矛盾を取り除き、一群の性質あるいは確定記述が、厳密な形での固有名の意味を提供することはできないが、固有名の指示を決定するとする Searle、その両者に限界を感じ、「性質あるいは確定記述」の代わりに「伝達の因果連鎖」という概念を導入することで、伝達の因果連鎖によって固有名の指示が決定されるとする Kripke という具合に、Frege より一歩先に進めようとする Searle、その Searle より更に一歩先に進めようとする Kripke の姿が見られる。そうした発展過程を分析することで、三者の考え方に共通して適用できる論理構造が見出される。それが $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) \rightarrow$ 固有名の指示という式である。その式は、三者の理論の特徴と相違を説明する為の有効な手段になれるものであると言える。以上の点を調べるのが、本稿の主目的である。

Key words: proper name (固有名), the description theory (記述理論), the causal theory (因果理論), G. Frege, J. R. Searle, S. Kripke

1. はじめに

日常的な言語使用の場面で、ある特定の、単一の対象を指示する為に、さまざまな方法が用いられる。例えば、確定記述 (definite descriptions: the king of France), 固有名詞 (proper nouns: Aristotle), 単数人称代名詞 (singular personal pronouns: I, you, he, she), 単数指示代名詞 (singular demonstrative pronouns: this, that), 時の副詞 (time adverbs: now, today), 場所の副詞 (place adverbs: here) などは、指示する為に用いられる言語表現で、指示表現 (referring expressions) と呼ばれているが、それらの指示表現を用いて、ある特定の、単一の対象を指示するのである。そして、そのような指示形態は、性質上、確定記述、そして固有名詞、更に単数人称代名詞・単数指示代名詞・時と場所の副詞という具合に、三つに分類して考えることができるであろう。事実、言語哲学における指示の問題は、確定記述 (簡単に記述 (descriptions) とする場合がある) と固有名 (proper names: 言語哲学者は、固有名詞の代わりとして、固有名を使用するのが一般的である。名前 (names) を固有名を意味するものとして使用することがよくあるが、名前を固有名だけでなく、自然類 (natural kinds) を指す普通名詞も含むものとして使用することもある。) と指標表現 (indexical expressions: あるいは、指標詞 (indexicals) : 例えば、David Kaplan によれば、指標表現はいくつかに分類できるとし、純粋な指標詞 (pure indexicals) として I, now, here, today が挙げられ、また指示詞 (demonstratives) として this, that, he, she が挙げられている) の各分野に関係しているのである。

そこで、「指示 (reference)」を問題にする際、指示のさまざまな形態を十分検討した上でなければ、本来の意味での明確化はありえないという言い方もできようが、果たして指示形態全てが同じ基準で分析できるのか、それともそれぞれの指示形態が異なる基準で分析される必要があるのか、また異なる基準で行う場合、それぞれの特性はどのようなものなのかは、簡単に結論を引き出せるような問題ではなく、今後の言語哲学者や言語学者の研究成果を検討していくしかないであろう。しかも、今まで述べてきた指示形態は、あくまでもある特定の、単一の対象を指示する為に用いられる指示表現に関するものであって、勿論単一特定の対象以外の対象を指示する為に用いられる指示表現もある訳で、それら全てを網羅した形での体系化をどのようにすべきかは、むしろ研究者に課せられた今後の課題であろう。例えば、言語哲学の分野について言えば、名前に関しては、1970年以前は固有名を中心に論じられ、1970年以降に自然類を指す普通名詞まで拡大されてきたという状況なのである。ともかく、そうした意味もあり、本稿では、あくまでも固有名に限定し、その範囲内で「指示」の問題を検討していくことにする。ただし、固有名を中心に検討を加えていくという意味で、固有名との関係から確定記述も検討対象となる。というのは、確定記述との比較関係で固有名が論じられてきたという歴史的背景があるからである。

では、固有名とは、一体どういうものなのであろうか。固有名には、人名、地名、国名、会社

名、団体名など、数多くの名前が含まれる。つまり、ある特定の人間、場所、国、会社、団体、その他のものに付けられた、特定の対象に固有な名前が固有名である。そして、固有名の例は、日々の生活の場で、数限りなく見いだされる。いつも目にし、耳にしている固有名に対して、ほかの指示表現に比べれば、遙かに単純明快であると思われるのも当然の事と言えるかもしれない。例えば、“John”という名前は、Johnという特定の個人の名前であり、その名前によって指示される対象は、勿論Johnという特定の個人で、指示に関しては、何ら問題がないように見えるであろう。しかし、一見単純明快に見える固有名は、Kaplanの言葉⁽¹⁾を借りれば、日常的なやりとりでは、実際便利なものかもしれないが、理論家にとっては、悪夢であり、固有名との戦いは、ある種の消耗戦ということになる。更に、彼によれば、固有名は、自転車のようなもので、誰でも容易に乗れるが、どのようにして習得したかと聞かれると、誰も正確には説明できず、その主な原因は、固有名とその対象との間にある親密な関係によるものであるということになる。事実、一見単純明快に見える固有名の指示に関する問題は、多くの言語哲学者、更に言語学者を巻き込む大論争となった。

2. 歴史的背景

固有名（あるいは、名前）の指示に関する理論の歴史の変遷を見ると、相対立する、二つの大きな流れがある。それらは、歴史的に絶えず同時に存在してきたという訳ではなく、一つの主流が先行し、1960年代に、その反動として、対立する理論が誕生し始め、先行する主流を押さえ付けた形で、新たな主流が形成されてきたのである。それら相対立する理論は、その理論的特性から区別して、記述理論（the description theory）、そして因果理論（the causal theory）と呼ばれるのが一般的である。では、記述理論は、その歴史的意義は認めながらも、現在の研究者の間では、すでに理論的評価を失ってしまい、因果理論のみが受け入れられているのであろうか。それとも、因果理論も同様の運命のもとにあるのであろうか。例えば、J. J. Katzは、“The Neoclassical Theory of Reference”（1979）⁽²⁾の中で、弁証法の正・反・合の進行過程に当てはめて、古典理論（古代時代まで遡れる）→因果理論（1960年代初頭から始まる）→新古典理論（1980年代に誕生しつつある）としている。つまり、弁証法の進行過程の意味から言うと、古典理論は、因果理論によって完全に乗り越えられ（古典という呼び方自体、すでに終わったことを表している）、因果理論が支配的となり、1980年代から両理論を乗り越える新たな理論が誕生しつつあるということで、結局彼の言う古典理論は、完全に駆逐され、因果理論も同様の運命を辿りつつあるということになってしまう。しかし、記述理論と因果理論は、歴史的意義は勿論のこと、今なお固有名（あるいは、名前）の指示を考える際の二つの基本的な考え方であることには変わりなく、理論的にも評価されるべきものである。そこで、具体的な検討に入る前に、両理論の歴史的推移をごく簡単に調べてみることにする。

固有名指示に関するさまざまな議論の中で、記述理論と因果理論の代表的な哲学者として挙げられるのは、研究者によって解釈の食違いが生まれるところであるが、一応記述理論の陣営としては、G. Frege—J. R. Searle, 因果理論の陣営としては、K. S. Donnellan—S. Kripke—H. Putnam—M. Devitt であると言えよう。そして、現在、議論の対象として頻繁に引き合いに出され、また自ら陣営の擁護の為に活躍している哲学者としてまず考えられるのは、Searle と Kripke であろう。Searle の “Proper Names” (1958)⁽³⁾ と Kripke の “Naming and Necessity” (1972)⁽⁴⁾ において、彼ら独自の理論を展開しているが、Searle と Kripke に関連して注目すべき点は、前者の “The Problem of Proper Names” (1969)⁽⁵⁾ と後者の “A Puzzle about Belief” (1979)⁽⁶⁾ の中で、二人が同じように Frege と J. S. Mill の考え方を比較検討しながら、前者が Frege を、後者が Mill を基本的には受け入れると明確にしていることである。そのことは、Searle と Kripke が自らの立場を守って、お互いに対立している関係、つまり記述理論と因果理論の対立関係 (Kripke は、“Naming and Necessity” の中で、Searle をかなり詳細に批判する一方で、Searle は、その批判に答えて、“Proper Names and Intentionality” (1983)⁽⁷⁾ の中で、逆に Kripke を具体的に批判している) を時代的に遡ると、Frege と Mill の対立関係が浮び上がり、結局 Frege—Searle 対 Mill—Kripke という関係を示すことになるのである。そして、Frege と Mill の基本的な考え方の相違は、記述理論と因果理論の対立関係全般の基礎を成すものと言えるのである。

最初に、記述理論について見ることにしよう。記述理論の陣営に属する哲学者として、例えば、R. Bertolet⁽⁸⁾ によれば、Frege, Russell, Strawson, Searle が挙げられ、また Katz⁽⁹⁾ によれば、Frege, Church, Lewis, Carnap, Searle が挙げられるという具合に、研究者によって異なるが、一般的には Frege 的視点の支持者とみなされる哲学者が属するとする点で一致していると言えよう。Frege は、“On Sense and Reference” (独語, 1892: 英訳, 1952)⁽¹⁰⁾ において、本来の意味での固有名の記述理論を展開しているとされている。そこには、(1)固有名は、単に指示のみならず、意味 (sense) をも持つ、(2)固有名の意味 (sense) は、その名前に結び付く確定記述から成る、(3)固有名は、確定記述の省略形である、という基本的な考えがある (Kripke⁽¹¹⁾ によれば、Frege 自身、(2)と(3)を明確な形では表明しておらず、また Michael Dummett (*Frege: Philosophy of Language*: 1973) も、Frege が意味 (sense) に関する記述理論を主張していないとしているが、Frege の使用する固有名の例から(2)と(3)を十分読み取れるし、哲学の世界では、そのようなものとして Frege を捉えるのが一般的であるとしている)。(2)と(3)に対しては批判しながらも、(1)を肯定することにより、基本的には Frege 的立場を取る Searle は、“Proper Names” (1958), “The Problem of Proper Names” (1969), “Proper Names and Intentionality” (1983) の中で、Frege 的考え方を修正した形で、記述理論を一貫して主張する。Searle にとっては、(1)、つまり「固有名には意味 (sense) があるのか」が根本的な問いであり、その問いに肯定的な答えを出すのが Frege と彼自身であり、否定的な答えを出すのが Mill (初期の Wittgenstein を含む) であり、因

果理論の陣営の哲学者であって、「固有名には指示のみで、意味はない」とする Mill と因果理論支持者は、当然の事として、否定されるべき対象である一方で、記述理論の正当性は現在でもなお疑うべきものではないのである。

次は、因果理論についてである。Mill は、*A System of Logic* (1843)⁽¹²⁾の中で、のちの因果理論陣営の基盤となる基本的な考え方を提供する。つまり、固有名とは、単なる名前にすぎず（意味のないラベルにすぎず）、対象を指示するだけで、それ以外の言語的機能を全く持たないものである、という Mill 的視点である。それは、意味 (sense) を媒介にしない、固有名と対象の間の直接的な指示関係を意味し、Frege 的視点とは異なるものである（意味 (sense) を介する、固有名と対象の間接的な指示関係を示す Frege 的視点は、Mill 的視点には見られない意味に関する理論を必要とする）。

因果理論は、直接的には、Frege 的視点に対する批判・反動として生まれてきたものである。年代的に見ると、例えば、Katz の “The Neoclassical Theory of Reference” (1979)⁽¹³⁾では、1960年代に開始したとされ、H. K. Wettstein の “How to Bridge the Gap Between Meaning and Reference” (1984)⁽¹⁴⁾では、過去20年間で言語哲学における革命的活動の時期であるとされ、D. W. Stampe の “Toward a Causal Theory of Linguistic Representation” (1977)⁽¹⁵⁾では、知識、記憶、信念、証拠、固有名、普通名、指示などの因果理論が最近流行しているとされているように、1960年代から始まり、1980年代までの約20年間、言語哲学における革命的活動と言われる程の Frege 的視点に対する批判・反動が高まり、一つの大きな流れが誕生・発展・確立されたことが分かり、しかも当時流行していた因果理論の影響の下で、固有名に関する因果理論も生まれてきたということになる。従って、ある意味で、Frege 的視点に対する反動をばねとし、Mill 的視点を基礎に据え、当時流行していた因果理論と結び付けながら、固有名の因果理論が誕生したと言えるであろう。そのような因果理論の陣営において、まず先駆者として挙げられるのが Donnellan と Kripke である。年代的には、Donnellan の方が Kripke よりも多少早いですが、理論的内容の面から言えば、Kripke の方が本来の意味での先駆者として位置付けられる傾向がある。それはともかくとして、1960年代に開始されたとされているのが Donnellan の “Necessity and Criteria” (1962)⁽¹⁶⁾で、その後 “Proper Names and Identifying Descriptions” (1970)⁽¹⁷⁾、 “Speaking of Nothing” (1974)⁽¹⁸⁾、 “The Contingent A Priori and Rigid Designators” (1977)⁽¹⁹⁾と続き、Donnellan に少し遅れて、Kripke の “Naming and Necessity” (1972) が現われ、“A Puzzle about Belief” (1979) が続く。そして、Kripke とは独立して、別に研究を進めながらも、Kripke と同様の結果に辿りつく Putnam の “Is Semantics Possible?” (1970)⁽²⁰⁾、 “Explanation and Reference” (1973)⁽²¹⁾、 “Meaning and Reference” (1973)⁽²²⁾がある。更に、より徹底した形で因果理論を展開する Devitt の *Designation* (1981)⁽²³⁾がある。そして、名前に関する議論において、1970年以前は、固有名を中心に論じられていたのが、1970年以降は、Kripke や Putnam などに見られるように、

自然類を指す普通名詞（例えば、water, gold など）をも含めて論じられており、その適用範囲は、現在では更に広がってきている。

記述理論の陣営の場合も同様であるが、因果理論の陣営においても、しばしば困難でもあり、また危険でもあるが、便宜上、異なる考え方をする哲学者を一つの範疇に押し込める訳で、従って、因果理論の陣営に属するとされている哲学者の間には、勿論相違が見られる。例えば、Bertholet⁽²⁴⁾によれば、Donnellanは、全てが因果関係で説明できるかどうかに疑問を持っている為、自らの考えを因果理論ではなく、敢えて歴史的説明の理論（the historical explanation theory）と呼ぶのであり、Kripke自身も同様の疑問を講義の時に表明したとし、その意味で、因果理論の陣営においても、Donnellanの歴史的説明理論、Kripkeの因果理論（理論というより、むしろ因果的描写：the causal “picture”）、Devittの指示の因果理論（the causal theory of reference：全てが因果関係で説明できるとした点で、本来の意味で、指示に関する因果理論と言える）に区別できるとしている。また、Wettstein⁽²⁵⁾は、次のように述べる。Frege的視点に反対する新指示理論家（the new theorists of reference：名前と対象の直接的な指示関係）の間で、指示の因果理論が一般的になっているとは、決して言えず、むしろ指示の因果理論と名前の因果理論（the causal theory of names）を区別することが重要で、その区別に従えば、新指示理論家が典型的に提供するのとは、指示の因果理論ではなく、固有名の因果的あるいは歴史的説明理論（a causal or historical explanation theory of proper names）であるとしている（名前の因果理論を受け入れることは、同時に指示の因果理論を認めることにはならないことになる）。その上で、Frege的視点に反対する者全員を、曖昧な形で、指示の因果理論の下に入れることを批判し、指示の因果理論は、知覚の因果理論、知識の因果理論といった他の因果理論に対応する指示の理論を指すのであり、その意味から言えば、Devittが指示の因果理論の典型的な支持者で、それに反して、Kripkeは、因果連鎖が重要であることは認めるが、因果連鎖によって全てが解決できるとは思っておらず、従って、彼の考えを指示の因果理論と特徴づけるのは、実際にそのように特徴づけられることがしばしばあるが、不適切であるとしている。そして、Donnellanは、意図理論（the intentional theory）の中心的な支持者（少なくとも、固有名と確定記述の指示に関しては）であって、因果理論自体にためらいを持っているとしている。

結局、因果理論の陣営に属するとされている哲学者の間にも、固有名に対する捉え方の食違いがあるということである。因果理論自体に疑問を抱く Donnellan の考えは、固有名の歴史的説明理論（あるいは、意図理論）とされ、理論ではなく、よりよい描写を提供することが目的であると自ら明示する Kripke の考えは、固有名の因果的描写とされ、Kripke の考えをさらに徹底化する Devitt の考えは、本来の意味での指示の因果理論とされるという具合に。ともかく、Wettstein の言うように、少なくとも固有名の因果的あるいは歴史的説明理論という共通点があり、その共通基盤の上に立って、それぞれ異なる考えを発展させるのであり、その意味で、その呼び

方が適切かどうかは別にして、因果理論の陣営に属する者として扱っていくことにする（少なくとも、記述理論の陣営と因果理論の陣営の相違を浮き彫りにする為には、便利であろう）。

3. 記述理論

固有名名の記述理論を考える際、出発点となるのが Frege 的視点である。Frege の記述理論の骨子は、次のようになる。

- (1) 固有名は、意味 (sense) を持つ (単に指示のみならず、意味 (sense) をも持つ)。
- (2) 固有名の意味 (sense) は、その名前に結び付く確定記述から成る。
- (3) 固有名は、確定記述の省略形である。

“On Sense and Reference”において、(1)については、以下のように述べられている。

It is natural, now, to think of there being connected with a sign (name, combination of words, letter), besides that to which the sign refers, which may be called the reference of the sign, also what I should like to call the sense of the sign, wherein the mode of presentation is contained. . . . The reference of ‘evening star’ would be the same as that of ‘morning star,’ but not the sense.

It is clear from the context that by ‘sign’ and ‘name’ I have here understood any designation representing a proper name, which thus as its reference a definite object (this word taken in the widest range), but not a concept or a relation, which shall be discussed further in another article. The designation of a single object can also consist of several words or other signs. For brevity, let every such designation be called a proper name.⁽²⁶⁾

The reference of a proper name is the object itself which we designate by its name; the idea, which we have in that case, is wholly subjective; in between lies the sense, which is indeed no longer subjective like the idea, but is yet not the object itself. The following analogy will perhaps clarify these relationships. Somebody observes the Moon through a telescope. I compare the Moon itself to the reference; it is the object of the observation, mediated by the real image projected by the object glass in the interior of the telescope, and by the retinal image of the observer. The former I compare to the sense, the latter is like the idea or experience. The optical image in the telescope is indeed one-sided and dependent upon the standpoint of observation; but it is still objective, inasmuch as it can be used by several observers. At any rate it could be arranged for several to use it simultaneously.

A proper name (word, sign, sign combination, expression) *expresses* its sense, *stands for* or *designates* its reference. By means of a sign we express its sense and designates its reference.⁽²⁷⁾

Frege の言葉から明らかなように、evening star–morning star の例を使用して、固有名には、指示の他に、意味 (sense) があると主張され、更に望遠鏡による月の観察の例を使用して、指

示と意味 (sense) の関係が示される。「金星」という同一の対象を指示する為に、「宵の明星」と「明けの明星」という二つの名前が使用されるのは、意味 (sense) の存在 (二つの異なる意味、つまり、二つの異なる表示様式) がなければ、説明できないもので、固有名が意味 (sense) を持つとすることにより、「宵の明星」の意味 (sense) (「日没後、西の空に見られる星」と「明けの明星」の意味 (sense) (「夜明けに、東の空に見られる星」) が異なると説明できるのであり、従って二つの名前の存在意義があるのである。そして、望遠鏡で月を観察する場合と類似して、固有名の指示 (ここでは、指示物 (referent) の意味で使われている) が観察対象である月自体に、意味 (sense) が対物レンズによって望遠鏡内部に投影された実像に、頭の中にある表象 (idea) が観察者の網膜像にそれぞれ対応する。つまり、固有名に関する表象—意味 (sense)—指示の関係の仕方は、観察者の網膜像—望遠鏡内部に投影された実像—月の関係に類似していることになる。従って、望遠鏡内部の像が一面的で、観察する位置によって変わると同様に、固有名の意味 (sense) も使用する個人によって、視点によって異なってくることになるが、それは決して主観的なものではなく、レンズによる望遠鏡内部の像と同様、客観的なものである。

ところが、(1)とは異なり、(2)と(3)に関しては、前述の Kripke の指摘があるように、明確な形では表明されていないが、Frege の使用する例がそのことを暗に示していると言えるのである。そこで、問題となるのは、固有名に意味 (sense) があると表明しても ((1)が正しくても)、肝心の意味 (sense) 自体がはっきりしない限り、((2)と(3)が十分説明されない限り)、その存在すら危うくなってしまふことである。では、意味 (sense) の記述理論を示していると言われる Frege の例とは、どのようなものであろうか。最初に、Kripke の指摘を引用しておくことにする。

the explicit doctrine that names are abbreviated definite descriptions is due to Russell. Michael Dummett, in his recent *Frege* (Duckworth and Harper and Row, 1973, pp. 110—111) denies that Frege held a description theory of senses. Although as far as I know Frege indeed makes no explicit statement to that effect, his examples of names conform to the doctrine, as Dummett acknowledges. Especially his 'Aristotle' example is revealing. He defines 'Aristotle' just as Russell would; it seems clear that in the case of a famous historical figure, the 'name' is indeed to be given by answering, in a uniquely specifying way, the 'who is' question. . . . In any event, the philosophical community has generally understood Fregean senses in terms of descriptions, and we deal with it under this usual understanding.⁽²⁸⁾

Kripke のみならず、他の多くの哲学者によって頻繁に引用される Frege の "Aristotle" の例の中で、意味 (sense) の記述理論は、どのように述べられているのであろうか。

In the case of an actual proper names such as 'Aristotle' opinions as to the sense may differ. It might, for instance, be taken to be the following: the pupil of Plato and teacher of Alexander the

Great. Anybody who does this will attach another sense to the sentence 'Aristotle was born in Stagira' than will a man who takes as the sense of the name: the teacher of Alexander the Great who was born in Stagira. So long as the reference remains the same, such variations of sense may be tolerated, although they are to be avoided in the theoretical structure of a demonstrative science and ought not to occur in a perfect language.⁽²⁹⁾

対物レンズによって望遠鏡内部に投影された実像に対応する固有名の意味 (sense) は、固有名を使用する個人によって、視点によって異なるとされたが、上記の例では、確定記述によって説明されている。Frege の例から読み取れることは、次のようなことである。

“Aristotle” という固有名に対して、ある人が the pupil of Plato and teacher of Alexander the Great という意味 (sense) を与え、別の人 が the teacher of Alexander the Great who was born in Stagira という意味 (sense) を与えるという具合に、Aristotle という同一の人物を指示するのに、人によって意味 (sense) が異なり、例えば、“Aristotle was the pupil of Plato and teacher of Alexander the Great”, “Aristotle was the teacher of Alexander the Great who was born in Stagira” ということになる。下線部、つまり指示物 (Aristotle という人物) の性質に関する確定記述が、“Aristotle” という固有名の意味 (sense) を成し、また Aristotle という人物の指示 (指示物としての人物 Aristotle) を決定し、固有名が確定記述の省略形であることを示す。それは、例えば、“Aristotle”=the teacher of Alexander the Great who was born in Stagira を意味する訳で、固有名に代わるものとして確定記述があることになる。

以上の説明だけでは、十分明らかになったとは勿論言えない。次に、他の哲学者の解釈を調べて、(2)と(3)をより鮮明にしていく必要がある。

[Searle] the meaning of a name is given by a single associated definite description⁽³⁰⁾

the definite description that a speaker associated with a proper name provided the “sense”, in his [Frege’s] technical meaning of that word, of the proper name for that speaker.⁽³¹⁾

he [Frege] seems to have thought that semantic content was always in words, specifically definite descriptions, and that the description gave a definition or sense of the name⁽³²⁾

if it were the case that a proper name is a shorthand description, then descriptions should be available as definitional equivalents for proper names⁽³³⁾

Suppose we ask the users of the name ‘Aristotle’ to state what they regard as certain essential and established facts about him. Their answers would constitute a set of identifying descriptions⁽³⁴⁾

Frege’s theory of sense and reference was originally intended as an analysis of language, a description of how referring expressions work . . . Frege asked the question what is the relation between a referring expression and its referent? And his answer was that the sense of the referring expression provides the “mode of presentation” of the referent. Reference is in virtue of

sense.⁽³⁵⁾

Searle の解釈によれば、次のようになる。

- (a)固有名に関連する（結び付く）単一の確定記述によって、固有名の意味（sense）が与えられる。
- (b)話し手が固有名に結び付けて考える確定記述は、あくまでもその話し手にとっての固有名の意味（sense）を提供する。
- (c)固有名に関連する（結び付く）意味内容は、いつも必ず言葉（とくに、確定記述）で表される。
- (d)固有名に関連する（結び付く）確定記述は、固有名の意味（sense）を提供し、固有名の定義を提供する。従って、固有名の意味（sense）＝固有名の定義となる。
- (e)固有名が確定記述の省略形であるとしている為、確定記述は、固有名と定義上同等のものとして利用可能となる。
- (f)確定記述は、固有名を使用する人がその対象について本質的で、疑う余地のない事実としてみとめるものから成る。
- (g)固有名（指示表現）の意味（sense）は、指示物の表示様式（指示の与えられ方）を提供するのであり、指示は、意味（sense）によって可能となる。

[Kripke] For the “Who is . . . ?” to be applicable one must be careful to elicit from one’s informant properties that he regards as defining the name and determining the referent, not mere well-known facts about the referent. (Of course this distinction may well seem fictitious, but it is central to the original Frege–Russell theory.)⁽³⁶⁾

Kripke の解釈では、

- (h)確定記述とは、指示物についてよく知られている事実ではなく、固有名を定義し、指示物を決定するものとみなされる性質（property）のことである。

[Kripke] . . . Fregean view holds that to each proper name, a speaker of the language associates some property (or conjunction of properties) which determines its referent as the unique thing fulfilling the associated property (or properties). This property (ies) constitutes the ‘sense’ of the name. Presumably, if ‘. . .’ is a proper name, the associated properties are those that the speaker would supply, if asked, “Who is ‘. . .’?” If he would answer “. . . is the man who _____,” the properties filling the second blank are those that determine the reference of the name for the given speaker and constitute its ‘sense.’ Of course, given the name of a famous historical figure, individuals may give different, and equally correct, answers to the “Who is . . . ?” question. Some may identify Aristotle as the philosopher who taught Alexander the Great, others as the Stagirite philosopher who studied with Plato. For these two speakers, the sense of “Aristotle” will differ: in particular, speakers of the second kind, but not of the first kind, will regard “Aristotle, if he

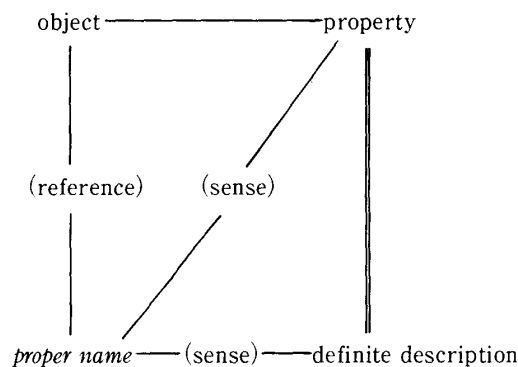
existed, was born in Stagira” as analytic. Frege (and Russell) concluded that, strictly speaking, different speakers of English (or German!) ordinarily use a name such as ‘Aristotle’ in different senses (though with the same reference). Differences in properties associated with such names, strictly speaking, yield different idiolects.⁽³⁷⁾

更に、Kripke の解釈では、次のようになる。

- (i)話し手は、それぞれの固有名に対して、ある性質を結び付けて考える。
- (j)固有名指示物（固有名によって指示される対象）は、その固有名に関連する（結び付く）性質を満たす唯一のものである。
- (k)話し手が固有名に結び付けて考える性質は、固有名指示物を決定し、また固有名の意味（sense）を成す。
- (l)固有名に関連する（結び付く）性質とは、「その固有名は、誰のことか？」という質問に答えて、話し手が提供するもののことで、“... is the man who ___” という解答の二番目の空所を埋める性質のことである（一番目の空所には、固有名が入る）。その性質は、その特定の話し手にとっての固有名の指示を決め、その意味（sense）を成す。
- (m)同一言語内においても、異なる話し手は、固有名を、指示は同一であるが、異なる意味（sense）で使用する。
- (n)固有名に結び付ける性質の相違は、異なる個人言語を生み出す。

以上の Frege の例、Searle の解釈、そして Kripke の解釈を通して、(2)と(3)の意味がはっきりしてくるであろう。ただし、上記の要約の中で、重複が見られるのは、一つには、表現上の相違から来るものであり、また一つには、解釈の食違いから来るものである。例えば、確定記述と性質は、後者を言葉で記述したものが前者で、置き換え可能で、その意味から言えば、かなりの重複が見出される。ともかく、以上述べてきたことを考慮に入れながら、Frege の固有名の記述理論（とくに、(2)と(3)）を説明することにする。

図表 I : Frege の固有名の記述理論



図表 I を見ても、また前述の望遠鏡の例からも分かるように、Frege にとっての固有名と指示

物の関係は、直接的なもの（図表Ⅰの左側のみ）ではなく、意味（sense）を介して指示が可能となるような間接的なもの（図表Ⅰの左側のみならず、右側をも含む全体）で、そこに根本的な特徴がある。その為には、意味（sense）の記述理論（図表Ⅰの右側を中心に）が必要となる。そこで、固有名に対する指示と意味（sense）の関わり方は、どのようになっているのであろうか。

ある特定の固有名を見たり、聞いたりすると、その固有名に関連する（結び付く）性質を連想する。ある特定の会社名、商品名、人名、地名、その他のさまざまな固有名に関連して、人により、さまざまな性質を連想する。例えば、「イタリアは、どういう国ですか。」と聞かれて、人によって異なる返答をすることからも分かるであろう（あくまでも分かりやすくする目的で、Fregeの例とは異なる例を使用する）。そして、実際に固有名を使用して、ある対象を指示する場合、同様に、その固有名に関連する性質（固有名によって指示される対象を考える訳で、例えば、「イタリア」という国名でイタリアという国を考える訳で、指示物（イタリア）に関する性質と言い換えられる）を連想し、その性質に関する確定記述、あるいはその固有名に関連する確定記述（固有名によって指示される対象に関する確定記述と言い換えられる）を考える。勿論、口に出して言うか、頭のなかで考えるかは別にして、求められれば、確定記述として言えるということである。その意味で、「その固有名は、誰／どこ／何のことか。」という質問に対する返答として捉えることが出来る。性質と確定記述を区別して、使い分けをしようとする、多少混乱が起きるかもしれない。というのは、「イタリアは、どういう国ですか。」という質問に対して、「イタリアは、古代ローマ帝国の発祥地です。」と答える場合、指示対象としてのイタリアという国と古代ローマ帝国の発祥地という性質に関するものであるが、実際に返答した時、すでに「イタリア」は固有名として使用され、「古代ローマ帝国の発祥地」は確定記述として使用されているということになるからである。ともかく、イタリアという国に関するさまざまな性質を人々は連想する訳で、「イタリア」という国名に関連して、さまざまな性質が連想され、さまざまな確定記述が可能となる。例えば、「イタリアは、スパゲッティとマカロニで有名な国です。」「イタリアは、古代遺跡の多い国です。」など。

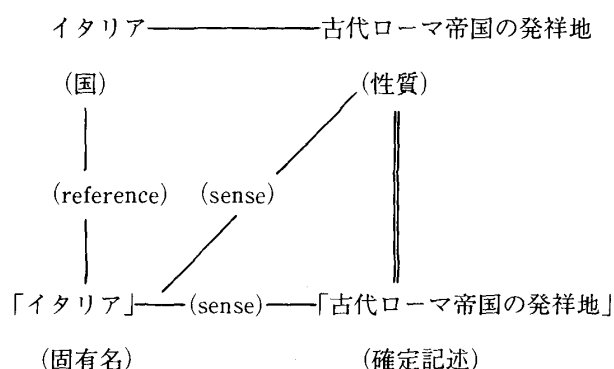
ある特定の場面で、ある話し手が固有名を使用して、ある対象を指示する場合、果たして固有名とその指示物の関係（つまり、指示そのもの）は、正確なのか、誤りがないのかという問題が生まれる。例えば、誤解やその他の理由で、「イタリア」という固有名によって指示される対象が、実際はイタリアという国ではなく、ギリシャやその他の国であるという可能性は、十分ありえる。そこで、固有名（「イタリア」という国名）とその指示物（ギリシャではなく、イタリアという国）の関係を成立される為、言い換えれば、指示が機能するようにする為、ある条件が必要となる。それは、固有名に関連する性質あるいは確定記述を満足させるものとして、しかも満足させる唯一のものとして指示物があるということである。つまり、ある対象は、固有名に

村越：固有名の指示

関連する性質あるいは確定記述を満足させることによって、初めてその固有名の指示物になりえるのである。例えば、「古代ローマ帝国の発祥地」を満足させる国が、ギリシャやその他の国ではなく、イタリアであるということにより、イタリアという国が「イタリア」という固有名の指示物になるという具合に。従って、固有名とその指示物の本来の関係が成り立つようにする為には、指示が機能するようにする為には、性質あるいは確定記述の介入が不可欠になる（指示物＝固有名に関連する性質あるいは確定記述を満足させる唯一の対象）。そして、本来の意味での固有名と指示物の関係が成立し、指示が機能しているという前提の下で、固有名に関連する性質あるいは確定記述は、同時にその指示物に関する性質あるいは確定記述になり、前者が後者に言い換えられることになる（「イタリア」という固有名に関連する性質あるいは確定記述＝イタリアという国に関する性質あるいは確定記述）。

以上の「イタリア」の例を図表Ⅰに当てはめると、図表Ⅱになる。

図表Ⅱ：「イタリア」の例（「イタリアは、古代ローマ帝国の発祥地です。」）



性質あるいは確定記述が図表Ⅰにおいて占める位置は、極めて大きいものである。というのも、固有名に関連する性質あるいは確定記述は、その固有名の意味（sense）を成すと同時に、その固有名の指示を決定する（指示の与えられ方を左右するものとして、また固有名によって指示される対象を決めるものとして、指示を決定するとも言えるし、また指示物を決定するとも言える）という役割を持っているためである。言い方を換えれば、固有名の意味（sense）は、固有名に関連する性質あるいは確定記述として捉えられ、固有名の指示は、固有名に関連する性質あるいは確定記述を満足させる唯一の対象を指示するものとして捉えられているためである。そのことは、固有名の意味（sense）が分からなければ、固有名の使用によって対象を指示することができないことを意味し、意味（sense）の持つ重要性を示すことになる。

固有名の意味（sense）として捉えられている性質あるいは確定記述は、どのような意味合いを持つのであろうか。ある固有名に関連して、話し手が幾つかの性質を連想し、幾つかの確定記述を考えると、それら全てが同じ比重を持っている訳ではない。その中で、指示する対象となる指示物に関して、最も重要で、本質的なものと話し手がみなすもの（厳密に言えば、話し

手がその固有名を定義し、その指示物を決めることができる(とみなすもの)を選び出し、その単一の性質あるいは確定記述をその固有名の意味 (sense) とする。ところが、話し手によって、最も重要で、本質的なものとみなすものが異なる場合がある為、あくまでもある特定の話し手にとっての固有名の意味 (sense) となる。その意味で、異なる話し手は、同一の固有名を、たとえ同一の指示物であっても、異なる意味 (sense) で使用するという現象が生まれてくる。例えば、「イタリアは、素晴らしい国です。」という文を発話する時、ある話し手は、「イタリア」という固有名の意味 (sense) を「古代ローマ帝国の発祥地」と捉えて(つまり、「イタリアは、古代ローマ帝国の発祥地です。」「イタリア(古代ローマ帝国の発祥地)は、素晴らしい国です。」を意味して言い、またある話し手は、その意味 (sense) を「古代遺跡の多い国」と捉えて(つまり、「イタリアは、古代遺跡の多い国です。」「イタリア(古代遺跡の多い国)は、素晴らしい国です。」を意味して言い、またある話し手は、その意味 (sense) を「スパゲティーとマカロニで有名な国」と捉えて、(つまり、「イタリアは、スパゲティーとマカロニで有名な国です。」「イタリア(スパゲティーとマカロニで有名な国)は、素晴らしい国です。」を意味して言うという具合に、三人とも、イタリアという国を指示物としながらも、異なる意味 (sense) で「イタリア」という固有名を使用していることになる。

ところが、固有名に関連する確定記述は、固有名の意味 (sense) を成すものとして捉えられているだけでなく、固有名の定義を成すものとしても捉えられている。それは、固有名の意味 (sense) とみなされる確定記述が、固有名の定義としても十分耐えうるものでなければならないことを意味している。従って、ある固有名に関連して、話し手が考える確定記述の内、最も重要で、本質的なものというだけでなく、あくまでもその固有名の定義に耐えうるもののみが、固有名の意味 (sense) になる資格があることになる。もしそうであるとすれば、固有名の意味 (sense) とみなされる確定記述は、同時にその固有名の定義になる為、固有名と定義上同等のものとなり、確定記述を省略した形が固有名であるという結果になる。例えば、話し手が固有名によって指示する時、その固有名に関連する確定記述を固有名に結び付けて、「イタリアは、古代ローマ帝国の発祥地です。」を考えるが、「古代ローマ帝国の発祥地」は、固有名の意味 (sense) を成すだけでなく、固有名の定義ともなる訳であるから、「イタリア」と「古代ローマ帝国の発祥地」が定義上同等のものとなり、後者を省略した形が前者であるということになる。そして、固有名=確定記述の省略形とすれば、固有名によって対象を指示するという事は、その対象の性質を記述することによってその対象を指示することになる。例えば、「イタリア」=「古代ローマ帝国の発祥地」の省略形とすれば、「イタリア」という固有名によってイタリアという国を指示する場合、イタリアという国をその国に関する性質を「古代ローマ帝国の発祥地」として記述することによって指示すると言える。つまり、確定記述によって(指示される対象の性質を記述することによって)対象を指示すると言えることになる。

以上が Frege の固有名に関する記述理論の概略である。注意すべきことは、Frege の使用する “Aristotle” という歴史上の人物の代わりに、「イタリア」を例にした点である。あくまでも理解しやすくする目的で異なる例を使用したか、さまざまな固有名の例を全て同一範疇で扱うことは、混乱を招く危険性があることだけを述べて、次に移ることにする。

Frege の考えを基本的には受け入れながらも、批判を加えて、修正した形の記述理論を主張するのが Searle である。Searle の考えは、“Proper Names” (1958), “The Problem of Proper Names” (1969), “Proper Names and Intentionality” (1983) の代表的な三論文の中で示されており、それらの論文に限定して話を進めていくことにする。Searle は、“Proper Names and Intentionality” の中で、昔を振り返って、次のように言う。

At the time I wrote “Proper Names” in 1955 there were three standard views of names in the philosophical literature: Mill’s view that names have no connotation at all but simply a denotation, Frege’s view that the meaning of a name is given by a single associated definite description, and what might be called the standard logic textbook view that the meaning of a name “N” is simply “called N”. Now the first and third of these views seem to be obviously inadequate. . . . Frege’s account, then, is the most promising, and it was that account I sought to develop.³⁸⁾

つまり、“Proper Names” を執筆した当時の哲学界には、固有名に関する三つの標準的な考え方があり、Mill の考え方、Frege の考え方、そして標準的な論理学教科書の考え方がそれぞれであるが、Frege の考え方を更に発展させる価値のあるものとして受け入れ、他の二つを不適切なものとして否定するとしている。そうした Searle の基本的姿勢は、上記の三論文の中で一貫して見られる。相違は、“Proper Names” と “The Problem of Proper Names” においては、Frege を基本的には受け入れながらも、Frege の抱えている問題点を取り除く為に、Frege を批判・修正して、Searle なりの記述理論を展開することに主眼が置かれているのに対して、“Proper Names and Intentionality” においては、いわゆる因果理論家（例えば、Donnellan, Kripke, Putnam など）による記述理論に対する批判に反論を行い、記述理論を擁護し、記述理論の正当性を主張することに主眼が置かれているという点である。それは、Mill と Frege の比較検討を通して、自らの記述理論を形作る段階を経て、因果理論と記述理論の対立関係の中で、自らの記述理論の正当性を再確認する段階へと移行する過程を意味し、その背後には、因果理論の台頭という重大な歴史的事実があったことを示している。

そこで、Frege と Searle の記述理論の類似点と相違点を調べることにする。最初に、前述の Frege 記述理論の骨子の内、(2)と(3)は否定するが、(1)は受け入れる（Frege 的な意味 (sense) の捉え方とは異なるが）点で、また図表 I の右側の存在を受け入れる（Frege 的な性質あるいは確定記述の関わり方とは異なるが）点で、Searle の記述理論は、Frege の記述理論と基本的な構造が類似していると言える。その意味で、勿論相違点も多くあるが、Kripke の言うように³⁹⁾、また

一般的に思われているように、Searle の考え方は、Frege 的であると言える。

["Proper Names"] How, for example, do we learn and teach the use of proper names? This seems quite simple—we identify the object, and, assuming that our student understands the general conventions governing proper names, we explain that this word is the name of that object. But unless our student already knows another proper name of the object, we can only *identify* the object (the necessary preliminary to teaching the name) by ostension or description; and, in both cases, we identify the object in virtue of certain of its characteristics. So now it seems as if the rules for a proper name must somehow be logically tied to particular characteristics of the object in such a way that the name has a sense as well as a reference; indeed, it seems it could not have a reference unless it did have a sense, for how, unless the name has a sense, is it to be correlated with the object?⁽⁴⁰⁾

序論的な記述の為、seem を使用しているが、最終的には上記のことを主張するのである。それはともかくとして、固有名は、指示だけでなく、意味 (sense) をも持つとされており、もし意味 (sense) がなければ、固有名と指示される対象の関係は、どのように説明すればいいのか、従って指示そのものが可能なのか疑問であるとしている。また、指示される対象の性質 (Searle は、characteristic を使用しているが、読みやすくする為、Kripke の property と同じ訳をする) が、何らかの形で関わっているとしている。結局、固有名には意味 (sense) があること ((1)) を認めると同時に、固有名と指示物の関係は、直接的な指示ではなく、性質あるいは確定記述との関わりを持つ間接的な指示であること (図表 I の右側が存在し、それが左側と関わる) を認めることになる。

["The Problem of Proper Names"] What I have said is a sort of compromise between Mill and Frege. Mill was right in thinking that proper names do not entail any particular description, that they do not have definitions, but Frege was correct in assuming that any singular term must have a mode of presentation and hence, in a way, a sense. His mistake was in taking the identifying description which we can substitute for the name as a definition.⁽⁴¹⁾

Mill と Frege の間の一種の妥協が Searle であるとしているが、それは上記の点に関してのみで、基本的には Frege 側の立場を取っている。ともかく、固有名に意味 (sense) があるとした Frege の主張を正しいものとして認めている。

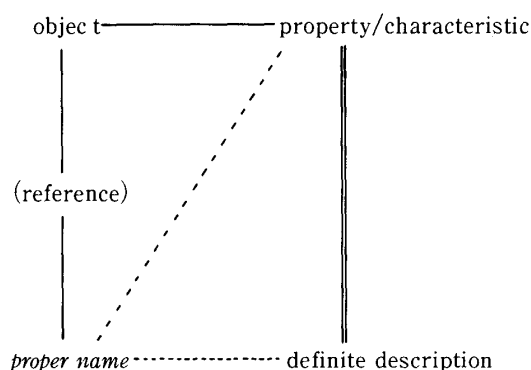
["Proper Names and Intentionality"] The problem of proper names used to be put in the form, "Do proper names have sense?", and in contemporary philosophy there are supposed to be two competing answers to that question: an affirmative answer given by the "descriptivist" theory, according to which a name refers by being associated with a description or perhaps a cluster of descriptions, and a negative answer given by the "causal" theory according to which a name refers because of a

“causal chain” connecting the utterance of the name to the bearer of the name or at least to the naming ceremony in which the bearer of the name got the name.⁽⁴²⁾

固有名の問題は、「固有名には、意味 (sense) があるのか。」という質問に集約できるとした上で、否定的な解答を出すのが因果理論であるのに対して、肯定的な解答を出すのが記述理論であって、固有名の指示は、確定記述との関連でなされるとしている。

以上の三つの引用から明らかなように、(1)を受け入れると同時に、図表Ⅰの右側の存在とそれが左側と何らかの形で関係していることを受け入れている。では、Frege との相違点は、どこにあるのであろうか。(2)と(3)を否定する一方で、図表Ⅰを基本的には容認する訳であるから、もともと図表Ⅰが(2)と(3)に関わるものであることを考えると、図表Ⅰの中の関わり方に Frege との相違があることは、すぐに気が付くであろう。

図表Ⅲ：Searle の記述理論



図表Ⅰと図表Ⅲの最大の相違点は、性質あるいは確定記述との関係で意味 (sense) をどのように捉えるかである。Searle は、意味 (sense) に関して、次のような結論を出す。

[“Proper Names”] We can now resolve our paradox: does a proper name have a sense? If this asks whether or not proper names are used to describe or specify characteristics of objects, the answer is “no.” But if it asks whether or not proper names are logically connected with characteristics of the object to which they refer, the answer is “yes, in a loose sort of way.” (This shows in part the poverty of a rigid sense–reference, denotation-connotation approach to problems in the theory of meaning.)⁽⁴³⁾

Frege と Searle における意味 (sense) の捉え方の相違は、上記の記述の中で、はっきりと表されている。つまり、Searle は、Frege 的意味 (sense) としては、固有名が意味 (sense) を持つとは言えないとしているからである。Frege にとっては、性質あるいは確定記述が固有名の意味 (sense) を成し、しかも固有名の定義となる訳で、その為、固有名が確定記述の省略形としてあり、固有名と確定記述が定義上同等なものとして交換可能となる訳で、指示の場合、固有名は、対象に関する性質の確定記述として使用される (対象の性質を特定化し、記述する為に、固

有名が使用される) ことになる。それは、固有名→確定記述の省略形→定義上同等なものとしての固有名と確定記述の交換可能性→確定記述という論理展開に基づく。従って、固有名が意味 (sense) を持つということは、“proper names are used to describe or specify characteristics of objects” ということで、固有名は、対象をその対象の性質を記述することによって指示すると言える。以上のような Frege 的意味 (sense) を否定する Searle にとっての意味 (sense) は、固有名がその固有名によって指示される対象の性質とゆるやかな仕方で論理的に結び付いているものである。その点を見つめていくことにする。

["Proper Names and Intentionality"] Frege had argued that the definite description that a speaker associated with a proper name provided the "sense", in his technical meaning of that word, of the proper name for that speaker. I argued against Frege that the associated definite description couldn't provide a sense or definition of the proper name because that would have as consequence that, for example, it was an analytic necessity that Aristotle was the most famous teacher of Alexander, if a speaker associated the definite description, "the most famous teacher of Alexander the Great", as the sense of the proper name "Aristotle". I argued that the associated cluster of Intentional contents that speakers associate with a proper name is related to the name by some much weaker relation than definition, and that this approach would preserve the virtues of Frege's account while avoiding its absurd consequences. . . . I try to show that proper names don't have definitions in the usual sense but that reference is secured by an associated Intentional content.⁴⁴⁾

Searle にとって、Frege とは異なり、話し手が固有名に結び付けて考える確定記述は、その固有名の意味 (sense) を提供してくれるものでも、その固有名の定義を提供してくれるものでもないのである。むしろ、話し手が固有名に結び付けて考える一群 (cluster) の意図的内容 (Intentional content) が、定義より遙かに弱い形でその固有名に関係しているのであり (「群れ」と「意図的内容」については、後で述べることにする)、指示は、その意図的内容によって決定されるのである。従って、性質あるいは確定記述が、固有名の意味 (sense) を成す同時に、固有名の指示を決めるという Frege 的關係ではなく、意図的内容 (取り敢えず、性質あるいは確定記述としても構わない) が、固有名の定義としてではなく、遙かにゆるやかな形で固有名に関わる一方で、固有名の指示を決めるという関係である。その意味で、図表 I と図表 III で示したように、前者における固有名と性質あるいは確定記述の關係は、固有名の意味 (sense) = 固有名の定義として性質あるいは確定記述に結び付く厳密なものであるが (実線で示される)、後者における固有名と性質あるいは確定記述 (あるいは、意図的内容) の關係は、固有名の定義として結び付かず、ゆるやかなものである (点線で示される) という対比ができる。では、Frege と Searle の食違いは、どうして生まれたのであろうか。

["The Problem of Proper Names"] Frege's instinct was sound in inferring from the fact that we do

make factually informative identity statements using proper names that they must have a sense, but he was wrong in supposing that this sense is as straightforward as in a definite description. His famous 'Morning Star—Evening Star' example led him astray here, for though the sense of these names is fairly straightforward, these expressions are not paradigm proper names, but are on the boundary line between definite descriptions and proper names.⁽⁴⁵⁾

Frege の例 “morning star—evening star” は、“On Sense and Reference” の冒頭部分（指示だけでなく、意味（sense）もあることを示す例として、2 ページ目に出ている。なお、例 “Aristotle” は、3 ページ目の注に出てくる。）で使用されており、重要な位置を占めるものと言える。その例が、Searle によると、典型的な固有名ではなく、むしろ確定記述と固有名の境界線に位置する例となる。その為、Frege は、確定記述の意味（sense）と固有名の意味（sense）を混同し、はっきりとした意味（sense）を持つ確定記述と近い形で固有名の意味（sense）を捉えてしまったと Searle は考える。そうした確定記述の意味（sense）に近い Frege 的意味（sense）の厳密さや正確さに対して、Searle は、固有名の意味（sense）をもっと曖昧で、不正確なものとして捉える。では、Searle にとっての曖昧さとは、何であろうか。

[“The Problem of Proper Names”] We have seen that insofar as proper names can be said to have a sense, it is an imprecise one. . . . the uniqueness and immense pragmatic convenience of proper names in our language lies precisely in the fact that they enable us to refer publicly to objects without being forced to raise issues and come to an agreement as to which descriptive characteristics exactly constitute the identity of the object. They function not as descriptions, but as pegs on which to hang descriptions. Thus the looseness of the criteria for proper names is a necessary condition for isolating the referring function from the describing function of language. . . . definite descriptions refer only in virtue of the fact that the criteria are not loose in the original sense, for they refer by providing an explicit description of the object (by telling us what the object is). But proper names refer without providing such a description (without so far raising the issue of what the object is).⁽⁴⁶⁾

(() 内は、“Proper Names” の引用)

指示機能の働き方の相違から、確定記述は、対象が何であるかについて明確に記述することにより指示するが、固有名は、対象が何であるかを問題にせずに指示するとして、両者を区別する。そこには、対象の明確な記述という厳密で、正確な確定記述としての意味（sense）に対して、それを必要としない固有名という相違がある。では、固有名には意味（sense）が心要ないかということ、そうではない。意味（sense）があるとすれば、曖昧で、不正確な意味（sense）である。それが固有名の特徴である。つまり、対象に関するさまざまな性質の内、対象を見分けるにはどの性質が必要かを問題にせずに、従って対象の性質を記述する必要もなく、対象を指示できるこ

とになり、固有名は、記述するという機能は持っていないが、記述を持ち出すきっかけとして機能し、それによって記述機能から指示機能を切り離すことができるのである。しかし、記述機能を伴わずに指示機能が働くとか、記述を持ち出すきっかけとして機能するとか、曖昧で、不正確な意味 (sense) があるとか言っても、それだけでは、固有名が指示される対象の性質あるいは確定記述と何らかの形で関わっているとか、固有名には意味 (sense) があるとかの明確な説明にはなっていないように思える。そこで、“Proper Names” と “The Problem of Proper Names” の中で示される「群れ」と “Proper Names and Intentionality” の中で示される「意図的内容」という二つの概念が重要になってくる。最初に、「群れ」概念について調べることにする。

固有名は、明確な記述によって指示することはない (“proper names refer without providing an explicit description of the object”) が、記述との何らかの関わりで指示する (“a name refers by being associated with a description or perhaps a cluster of descriptions”) とし、固有名の意味 (sense) は、厳密で、正確なものではないが、曖昧で、不正確なものであるとする Searle の指示と意味 (sense) に対する捉え方は、確定記述と固有名が持つ機能・役割の区別に基づくものであるが、Frege の捉え方とは異なり、はっきりしていないように見える。しかし、それは、Frege 的記述理論が抱えている問題点を取り除く (少なくとも、ある程度乗り越える) ものとみなされている「群れ」概念から来る曖昧さ (looseness) によるものである。そうした曖昧さを絶えず持つのが固有名であると Searle はしている。ただ、固有名の指示が性質あるいは確定記述と何らかの関わりを持っており (明確な確定記述によるか、それ以外のものによるかは別にして)、固有名が何らかの形で意味 (sense) を持っている (厳密で、正確なものか、曖昧で、不正確なものかは別にして) とする点で、Frege と Searle が共通基盤に立っていることは、忘れてはいけなから。ともかく、「群れ」と固有名の結び付きは、どうなっているのだろうか。

[“Proper Names”] referring uses of “Aristotle” presuppose the existence of an object of whom a sufficient but so far unspecified number of these statements are true. To use a proper name referringly is to presuppose the truth of certain uniquely referring descriptive statements, but it is not ordinarily to assert these statements or even to indicate which exactly are presupposed.⁽⁴⁷⁾

[“The Problem of Proper Names”] suppose we have independent means of identifying an object, what then are the conditions under which I could say of the object, ‘This is Aristotle?’ I wish to claim that the condition, the descriptive power of the statement, is that a sufficient but so far unspecified number of these statements (or descriptions) are true of the object. In short, if none of the identifying descriptions believed to be true of some object by the users of the name of that object proved to be true of some independently located object, then that object could not be identical with the bearer of the name. It is a necessary condition for an object to be Aristotle that it satisfy at least some of these descriptions. This is another way of saying that the disjunction of

these descriptions is analytically tied to the name 'Aristotle'—which is a quasi-affirmative answer to the question, 'Do proper names have senses?' in its stronger formulation.⁽⁴⁸⁾

固有名の使用によって対象を指示する時、話し手は、その対象に関して、一つではなく、幾つもの性質を連想し、幾つもの確定記述を考え、しかもそれらが真であると信じている訳で、固有名の指示的使用は、指示される対象が存在し、しかもその対象に関するものと考えられる確定記述、十分ではあるがまだ特定されていない数の確定記述がその対象について真であることを前提としている。そうした前提があって、初めて固有名の指示が可能となるのである。その前提の必要性は、逆の場合を想定すれば、明らかになる。例えば、十分ではあるがまだ特定されていない数の確定記述がその対象について全て真であると話し手が信じていても、もしそれら全てが誤りであれば、その対象を指示していないことになってしまう（あるいは、指示は、不成功に終わったと言える）。というのは、その固有名によって指示されるべき対象とその固有名を与えられた対象が、本来一致すべきものであるのが、一致しないからである（例えば、名前“Aristotle”によって指示される人物と“Aristotle”という名前を持つ人物が一致しない）。従って、十分ではあるがまだ特定されていない数の確定記述が固有名に関わりを持っているとする前提（それらの確定記述が対象について真であるとする前提）は、少なくとも必要になってくる。そして、十分ではあるがまだ特定されていない数（a sufficient but so far unspecified number）が、「群れ」（cluster）を指すのである（“cluser”という言葉は、“Proper Names”（1958）と“The Problem of Proper Names”（1969）の中では、使用されておらず、“Proper Names and Intentionality”（1983）に現われる。それ以前に、Kripkeの“Naming and Necessity”（1972）の中で、Searleなどがthe notion of a cluster conceptを使用してきたとされているし、またKripkeの“A Puzzle about Belief”（1979）の中で、SearleなどがFrege–Russell的思考を‘clustering’ the sense of the nameで修正しようと試みてきたとされている）。その「群れ」という概念（a cluster of「一群の」：Wittgensteinのfamilyという概念（a family of「一群の」）に類似する）に「選言」という概念（disjunction：幾つかある内で、少なくともあるものが真であること）が加えられる（“Proper Names”には現れないが、“The Problem of Proper Names”の中で、「選言」が使用されている）。さて、「群れ」と「選言」の二つの概念が意味するものは、何であろうか。幾つあるか数の特定化はできないが、対象を見分け、同定する（identify）のに十分な数の確定記述で、それらの確定記述の内、少なくともあるものが対象を同定する決め手になるが、しかしどれがそれなのか正確には示せないということなのである。そうした曖昧さを持つ「一群の」確定記述が固有名に関わるのである。

次は、「意図的内容」である。その言葉は、“Proper Names and Intentionality”の中で、因果理論家による記述理論の批判に反論を加える過程で使用されており、今まで述べてきたことが、あくまでもFregeの記述理論との関係でSearleの記述理論を明らかにする為のものであることを

考えると、多少意味合いが異なってくるが、上記の内容と関係があるので、一応ここで扱うことにする。記述理論を the Intentionalist or internal theory, 因果理論を the external causal chain of communication theory と位置付けし、両理論を人間の内的心理に関係するかどうかで区別した上で⁽⁴⁹⁾、性質あるいは確定記述の代わりに、「意図的内容」(Intentional content) が使用される。断片的であるが、Searle の言葉を引用すると、次のようになる。

the “descriptive” Intentional content that is associated with the name in the minds of speakers; some of this Intentionality will normally be expressed or at least be expressible in words.⁽⁵⁰⁾

notice that what counts is not the fact that I give a *verbal* description, but that there is an Intentional content.⁽⁵¹⁾

“identifying description” does not imply in words, it simply means: Intentional content, including Network and Background, sufficient to identify the object, and that content may or may not be in words.⁽⁵²⁾

以上の引用から推測すると、「意図的内容」とは、話し手が固有名に関連して（あるいは、固有名によって指示される対象に関して）、頭の中で連想する内容全てのことである。それは、偶然でもなく、無意識でもなく、話し手が意図的に考える内容のことで、そのような話し手の頭の中にある内容は、必ず言葉で表されていないものではなく、言葉で表されることもあれば、そうでないこともある。要するに、話し手の頭の中に意図的内容が存在すること、そしてそれが指示される対象を同定するのに十分な内容であることが、重要となる。勿論、すでに触れたように、確定記述も、そのような意味合いで使用されている。つまり、性質を言葉で表したものが確定記述であるという言い方は、誤解を招くものかもしれないが、性質と確定記述の違いをはっきりさせる為のものであり、確定記述とは、実際に口に出して言うか、頭の中で考えるかは別にして、求められれば、確定記述として言えるということを意味するものである（対象に関する性質を、あくまでも頭の中で、言葉で考えるという言い方もできるかもしれない）。その意味で、一般的には、対象が何であるかという質問に対する解答という形で捉えられている（実際に、質問されるのではなく、仮定として、もし質問されれば、その答えの形式が確定記述の形式を取るということである）。もしそうであるとすれば、性質あるいは確定記述＝意図的内容となるのであろうか。人間の内的心理に強く結び付いていることを強調する為に、「意図的内容」という言葉を使用していることは、確かであるが、より広い意味で（あるいは、より曖昧な意味で）性質あるいは確定記述を捉える為のように思える。

まず第一に、「群れ」概念との関係である。「一群の性質あるいは確定記述」の意味は、対象を同定するのに必要な性質あるいは確定記述の数（あるいは、対象に関して、話し手が思い付く数）は未定であるが、十分な数で、しかもそれら全てが対象の同定の決め手になる訳ではなく、その内の幾つかが決め手となるが、それらがどれなのか正確には示せないということである。そ

うした曖昧さを生かす言葉と思える「意図的内容」を使用して、「一群の意図的内容」とした方が都合がいいと言えよう。それは、話し手の頭の中にある固有名に関連する（対象に関する）内容を単に指すだけで、その内容の中身（性質あるいは確定記述の数、一つ一つの特定化、どれが決め手になるかの判断など）を具体化する必要がないからである。

第二に、固有名分類との関係である。因果理論家の使用する例をも含めて、全て記述理論の中で処理できるとして、次のような分類をする。

First, the central cases. The most important and extensive use of names for each of us is of people, places, etc., with which we are in daily, or at least frequent, personal contact. Baptism apart, one originally learns these names from other people, but, once learned, the name is associated with such a rich collection of Intentional contents in the Network that one does not depend on other people to determine which object one is referring to. Think, for example, of the names of your close friends and family members, of the town where you live or the streets in your neighborhood. Here there is no question of any chain of communication. . . .

Second, there are names which have prominent uses, where the uses are not based on acquaintance with the object. The Intentional content associated with these names is for the most part derived from other people, but it is rich enough to qualify as *knowledge about* the object. Examples for me would be such names as “Japan” or “Charles de Gaulle”. In such cases, the Intentional content is rich enough so that it sets very strong constraints on the sort of things that could be referred to by my uses of the names. . . .

Third, there are uses of names where one is almost totally dependent on other people’s prior usage to secure reference. It is these cases that I have described as parasitic, for in these cases the speaker does not have enough Intentional content to qualify as knowledge about the object. . . . Even in these cases the limited Intentional content places some constraints on the type of object named.⁶³⁾

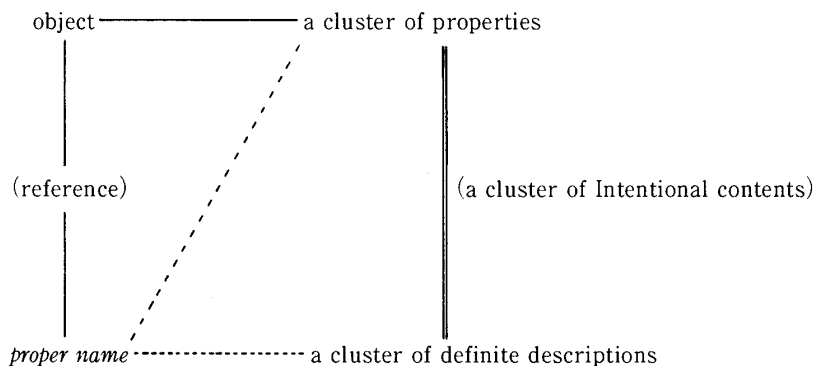
引用で明らかのように、さまざまある固有名の例を三つに分類する。それらは、直接的接触の場合（日常的に直に接触している対象で、豊富な量の情報を持っている為、他人に依存することなく、対象を見分け、同定できるのであり、従ってそれらの固有名に関連して豊富な意図的内容が考えられる）、他人からの知識の場合（直に接触している対象ではないが、他人から得た情報に基づいて、対象についての知識を持っている為、対象を見分け、同定できるのであり、従ってそれらの固有名に関連して考えられる意図的内容は、他人からの知識による）、寄生的な場合（日常的な接触もなく、他人から得た知識もなく、ただ他人が使用しているのを聞いて、あるいは社会で使用されているのを聞いて、そのまま固有名を使用するだけで、従ってそれらの固有名に関連して考えられる意図的内容は、極めて貧弱で、ある対象が他人によって（社会で）ある固

有名で呼ばれていることを知っているだけである)の三つであるが、「意図的内容」という言葉は、非常に広い意味で使用されている。例えば、量的には、豊富なものから貧弱なものまであり、質的には、見たり、触ったりして、直に接触して得る生の情報から、他人から得る情報、そしてよく分からずに、他の皆が使用する固有名をそのまま使用するものまでである。もし「意図的内容」の代わりに、「性質あるいは確定記述」を使用したら、説明しにくくなり、するにしても、複雑になってしまう。直接的接触の場合は、とくにそうであろう。

以上の二つの理由で、「意図的内容」は、「性質あるいは確定記述」より広い意味で使用できる言葉であると言える。そして、それは、「群れ」や「選言」と同様に、Searleの記述理論に適した表現であると言える。勿論、「性質あるいは確定記述」という言葉も同様に、広い意味で使用できるのであるが。ただ気を付けなければいけないことは、Searle自身、とくに明示せずに、「性質あるいは確定記述」を「意図的内容」の意味で使用していることである(勿論、「意図的内容」がまだ紹介されていない“Proper Names”と“The Problem of Proper Names”では、もっぱら「性質あるいは確定記述」が使用されているが)。一つには、一般的には後者ではなく、前者が使用されている現実がある為であり、また一つには、前者自体が、すでに後者の意味をある程度含んでいる為であり、また一つには、後者の例として具体的に検討する場合、どうしても前者を使用しなければならない為であろう。その解釈はともかくとして、またどちらの言葉を使用するかは別にして、「群れ」、「選言」、「意図的内容」などによって表される内容の方が重要であり、それがSearleの記述理論の中心を成すもので、Fregeの記述理論から区別される場所のものである。なお、一般的な慣習に従い、本稿でも、とくに必要がない限り、「性質あるいは確定記述」を使用することにする。

今まで述べてきたことを踏まえながら、Fregeの記述理論との関係で、Searleの記述理論の特徴を概観することにする。

図表Ⅳ：Searleの記述理論



最初に言えることは、図表Ⅰの「性質あるいは確定記述」に「一群の性質あるいは確定記述」（あるいは、「一群の意図的内容」）を入れ替えることによって、Frege と Searle の両理論の特徴の比較ができるということである。そこで、上記の図表を挙げることにする（「性質あるいは確定記述」を「一群の性質あるいは確定記述」あるいは「一群の意図的内容」の意味として使用するならば、図表Ⅲのままで構わないが）。

Frege の記述理論（図表Ⅰ）と Searle の記述理論（図表Ⅳ）を比較して、すぐに気が付くことは、性質あるいは確定記述が固有名に関わる（図表Ⅰと図表Ⅳにおいて、右側の存在を認め、それが左側に何らかの形で関係する）とする点では、一致するが、ある特定の、単一の性質あるいは確定記述が固有名に関わるとする Frege（図表Ⅰの右側の「性質あるいは確定記述」は、本来ある特定の、単一の性質あるいは確定記述としてある）に対して、一群の性質あるいは確定記述が固有名に関わるとする Searle の間には、「ある特定の、単一の」と「一群の」の相違があるという点である。その相違が、両者の相異なる記述理論へとつながっていくことになる。まず最初に、結論的に言えば、「群れ」概念自体（「選言」と「意図的内容」の概念を含むものとして）の曖昧さが原因となって、それと関わりを持つ固有名の意味（sense）と指示が影響を受け、固有名の曖昧さに結び付いていくことになる。それは、Frege の記述理論との相違の基をなすものであり、Frege より一歩先に進んだとされるものでもある。そうした点に関して、少し具体的に見ていくことにする。

固有名に関連して（固有名によって指示される対象に関して）、話し手が幾つもの性質を連想し、幾つもの確定記述を考えるという点については、Frege にしても、Searle にしても、決して否定することはない。問題は、Frege にとっては、性質あるいは確定記述が固有名の意味（sense）を成すと同時に、固有名の定義を提供するものとして捉えられており、しかもそれが固有名の指示を決定するものとして捉えられていることである。従って、固有名に関連して連想し、考える性質あるいは確定記述がたとえ幾つもあったとしても、固有名の定義となり得る性質あるいは確定記述は、それらの内、ある特定の性質あるいは確定記述で、単一のものであるはずで（固有名に関連する性質あるいは確定記述を並び立てて、それら全てを固有名の定義とすることはできない）、もしそれが誤りであれば、指示そのものができないことになってしまう（あるいは、試みたが、不成功に終わったことになる）。例えば、再び「イタリア」の例を使うと、ある話し手が「イタリア」という国名に関連して、「古代ローマ帝国の発祥地」、「古代遺跡の多い国」、「スパゲティーとマカロニで有名な国」などを考えたとしても、「古代遺跡の多い国」は、ギリシャにも言えることであり、「スパゲティーとマカロニで有名な国」は、イタリア以外の国にも言えることであるかもしれないので、「イタリアは、素晴らしい国です。」という文を話し手が発話する時、「古代ローマ帝国の発祥地」として捉えて、「イタリア（古代ローマ帝国の発祥地）は、素晴らしい国です。」の意味で言うのなら、「イタリア」という国名でイタリアという国を指示す

ることになるが(つまり、指示が成功する)、もしそれ以外のものとして捉えるならば、指示そのものが成り立たないことになってしまう(つまり、指示が不成功に終わる)。また、三人の話し手の内、一人が「古代ローマ帝国の発祥地」として捉えて、「イタリア(古代ローマ帝国の発祥地)は、素晴らしい国です。」の意味で言い、二人目が「古代遺跡の多い国」として捉えて、「イタリア(古代遺跡の多い国)は、素晴らしい国です。」の意味で言い、三人目が「スパゲティーとマカロニで有名な国」として捉えて、「イタリア(スパゲティーとマカロニで有名な国)は、素晴らしい国です。」の意味で言う場合も同様で、最初の話し手だけが指示し、あとの二人は、結局指示できないことになってしまう。ところが、私たちは、「イタリア」という国名で実際にイタリアという国を指示している訳で、そこに矛盾が生まれる。

次に、Fregeの言うように、固有名の意味(sense)は、あくまでもある特定の話し手にとっての意味(sense)であり、従って固有名の定義も、あくまでもある特定の話し手にとっての定義であるとしたら、どうなるであろうか。例えば、同一の固有名に関連して、三人の話し手がそれぞれ幾つもの性質を連想し、幾つもの確定記述を考え、それらの中で、最も重要で、本質的なものとみなし、その固有名の定義になりえるものと信じるものに基づいて、一人が「イタリア(古代ローマ帝国の発祥地)は、素晴らしい国です。」の意味で言い、二人目が「イタリア(古代遺跡の多い国)は、素晴らしい国です。」の意味で言い、三人目が「イタリア(スパゲティーとマカロニで有名な国)は、素晴らしい国です。」の意味で言う場合、三人は、同一の「イタリア」という国名をそれぞれ異なる意味(sense)で使用し、しかもそれぞれがイタリアという国を指示できることになる。もしそうであるとすると、人数が増えていくと、性質あるいは確定記述の数が増え、それらが全て同一の「イタリア」という国名の意味(sense)になり、その定義になってしまう。その場合、多くの人によって「イタリア」という国名でイタリアという国が指示されている現実は、勿論説明できるであろうが、その固有名の定義になりうる性質あるいは確定記述は、数的に無限になってしまい、そこにまた矛盾が生まれる。

結局のところ、ある特定の、単一の性質あるいは確定記述が固有名に関わるとする前提そのものが、矛盾を生み出す原因となっている。私たちの日常的な固有名の使われ方を思い出せば、容易に想像できよう。前述の直接的接触の場合のように、例えば、「新宿公園」という名前を使用して新宿公園を指示する時、「新宿公園」という名前に関連して数多くの性質あるいは確定記述を考えるであろう。事実、私たちは、「新宿公園」という名前で新宿公園を指示している訳であるが、それらのうちのどれが、その名前の定義になりえるものなのかと聞かれても、言い換えれば、新宿公園(対象)を新宿公園(固有名によって指示される指示物)たらしめているものはどれか(ある対象が固有名の指示物になる為には、その固有名に関連する特定の、単一の性質あるいは確定記述を満足させなければならないので)と聞かれても、正確には答えられないであろう。そこで、上記の矛盾を取り除く為の一つの方法として考えられるのが、Searleの「群れ」概念で

ある（因果理論のように、性質あるいは確定記述そのものの介入を否定することも一つの方法であるが）。

一対一の関係（一つの性質あるいは確定記述と一つの固有名の関係）を前提にすること自体に、その問題の原因がある。というのも、一対一の関係にすると、両者を定義の関係として捉えやすくしてしまうからである。それをX対一の関係（Xは、数や内容の中身が未定であるが、状況によりある程度の特定化・具体化が可能であることを示すものとする）に置き換えることにより、前者の抱えている問題を解決することができる。それがSearleの試みであると言えよう。具体的には、一群の性質あるいは確定記述と一つの固有名の関係を前提にすることである。それは、図表Ⅰに「一群の性質あるいは確定記述」（「一群の意図的内容」の方が、Xの特徴をよく表しているが）を入れ替えて図表Ⅳにすることであるが、入れ替えることで（つまり、「群れ」概念を中心にして押し進めていくと）、固有名一性質あるいは確定記述一対象の関わり方全体が変化してくる。

最初は、固有名の意味（sense）である。一対一の関係にすると、ある特定の、単一の性質あるいは確定記述が固有名の意味（sense）を成し、その定義となることは、簡単に導きだされる。ところが、X対一の関係にすると、たとえ同じ論理を利用して、その定義になりうるものがどれか確定できず、その意味（sense）となるのがX全体になってしまう。例えば、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ を一群の性質あるいは確定記述とすると（Xが一群の性質あるいは確定記述を、 $x^1 \dots x^n$ が個々の性質あるいは確定記述を指し、（ ）内の数や中身を未定なものとするが、個々のケースで、ある程度具体化・特定化が可能であるとする）、固有名 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ は、定義として曖昧すぎて、定義として使えず、また $x^1 \dots x^n$ の中の一つを取りだすにしても、どれなのか確定できない為、不可能となる（固有名の定義 $=x$ であれば、可能である）。固有名の意味（sense） $=X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ は、 x の数が未定であり、 x の中身が未定である（幾つかの x の中身が具体化できても、全体的には、未定部分が多すぎる）為、可能であっても、固有名の意味（sense） $=x$ とは異なり、かなり曖昧で、不正確なものとなり、両者が何らかの形で関わっているという意味で、可能であるという位である。

次は、固有名の指示である。一対一の関係にすると、ある特定の、単一の性質あるいは確定記述が固有名の指示（あるいは、指示物）を決定し、従って対象のある特定の、単一の性質を明確に記述することによってその対象を指示することができることになる。ところが、X対一の関係にすると、同じ論理を進めても、全体の様相が変わってくる。Xが固有名の指示を決定するとしても、Xを明確に記述することはできず、単にXによって対象を指示するとしか言えず、従ってXとの何らかの関わりで対象を指示するとしか言えなくなる。例えば、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) \rightarrow$ 固有名の指示（ \rightarrow を指示の決定を指すものとする）が可能であるとしても、（ ）内の x の数も、 x の中身も未定である為、 $x \rightarrow$ 固有名の指示のように、 x を明確に記述することによって対象を

指示することができず、従って $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ によって対象を指示するしかないが、() 内の x が一つもなければ、指示そのものが不可能になるので、指示する以上、() 内の x が一つ以上存在し、少なくとも一つ以上の x の中身が具体化されていなければならない。その意味で、 $x \rightarrow$ 固有名の指示の場合とは異なり、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ の明確な記述はできないが、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ によって指示することはできるし、従って記述機能がなくても、指示機能は働くことができると言え、また () 内の x が一つもないか、それとも () 内の x 全ての中身が未定であれば、記述とは全く関係なくなってしまうが、() 内の x が一つ以上存在し、しかも一つ以上の x の中身が具体化されている限り、記述との関わりは、保たれていると言える。

すでに明らかなように、Frege の記述理論と Searle の記述理論の相違は、一言で言えば、 x と $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ の相違に基づくものである。その相違は、次のように展開されていく。 $x =$ 固有名の意味 (sense), $x =$ 固有名の定義, $x \rightarrow$ 固有名の指示であるのに対して、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) =$ 固有名の意味 (sense), $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) \rightarrow$ 固有名の指示である。従って、 $x =$ 固有名であるのに対して、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) \rightarrow$ 固有名になる (一が厳密で、強い結び付きを、…がゆるやかで、弱い結び付きを示すものとする)。以上が、今まで述べてきたことの簡単な要約となるものである。結局、「群れ」概念 (「選言」と「意図的内容」を含む) を導入することにより、つまり x を $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ にすることにより、Frege の記述理論が抱える問題点を取り除き、それを修正することで、一歩進めたのが Searle の記述理論であり、その特徴は、「群れ」概念自体の持つ曖昧さが原因となって、固有名の意味 (sense) と指示が影響を受け、固有名の曖昧さとなって現われるということである。そして、固有名と指示される対象の関係は、次のようになる。

[Frege] a speaker uses N to refer to O by x associated with N .

従って、a speaker refers to O because and only because O satisfies x associated with N .

[Searle] a speaker uses N to refer to O by $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ associated with N .

従って、a speaker refers to O because and only because O satisfies $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ associated with N .

(N は固有名を、 O は対象を指すものとする)

最後に、簡単に触れておくことがある。「群れ」概念の導入によって、一歩先に進んだとされる Searle の記述理論においても、Frege の場合と同様、Kripke の指摘⁵⁴⁾ によると、「一群の性質あるいは確定記述」が、個々の話し手によって変化するものとして捉えられているとされる。その解釈の仕方は別にして、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ は、全ての話し手に適用できる公式である。ただ、個々の発話の場面により、個々の話し手により、() 内の x の数が異なり、 x の中身が異なる訳で、その意味では、個々の話し手によって変化すると言える。つまり、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ は、一般的な公式として、全ての話し手にとって不変であるが、() 内の変

化により、個々の話し手によって変化すると言えるのである。

4. 因果理論

ここでは、代表的な因果理論家とみなされている Kripke を中心に検討していくことにする。その検討目的は、あくまでも Kripke の因果理論を通して、記述理論と因果理論の相違を明らかにすることにある。その関係で、Kripke の因果理論に対する反対意見も扱うことにする。

Kripke は、“A Puzzle about Belief” (1979) の中で、“Naming and Necessity” (1972) を振り返って、次のように言う。

In other writings, I developed a view of proper names closer in many ways to the old Millian paradigm of naming than to the Fregean tradition which probably was dominant until recently. According to Mill, a proper name is, so to speak, *simply* a name. It *simply* refers to its bearer, and has no other linguistic function. In particular, unlike a definite description, a name does not describe its bearer as possessing any special identifying properties.¹⁵⁵⁾

there are important theoretical reasons for viewing the “Naming and Necessity” approach in a Millian light. In that work I argued that ordinarily the real determinant of the reference of names of a former historical figure is a chain of communication, in which the reference of the name is passed from link to link. Now the legitimacy of such a chain accords much more with Millian views than with alternatives. For the view supposes that a learner acquires a name from the community by determining to use it with the same reference as does the community. We regard such a learner as using “Cicero is bald” to express the same thing the community expresses, regardless of variations in the properties different learners associate with ‘Cicero,’ as long as he determines that he will use the name with the referent current in the community. That a name can be transmitted in this way accords nicely with a Millian picture, according to which only the reference, not more specific properties associated with the name, is relevant to the semantics of sentences containing it. . . . we should not thereby forget that the legitimacy of such a chain suggests that it is just preservation of reference, as Mill thought, that we regard as necessary for correct language learning. . . . The spirit of my earlier views, then, suggests that a Millian line should be maintained as far as is feasible.¹⁵⁶⁾

Kripke の言葉から、彼が Mill 的立場にいることが、明確に読み取れる。それは、Frege と Frege の流れを汲む Searle と対立関係にあることを示し、Frege—Searle 対 Mill—Kripke の構図が出来上がる。では、Mill と Kripke は、どの点で共通しているのでしょうか。Mill の基本的考えは、確定記述とは異なり、固有名には、対象を記述する機能が全くなく、従って対象に関する性質に関係なしに、対象を指示する機能があるだけで、そこには意味 (sense) が介入する余地

など全くないということである。つまり、固有名は、単なる名前にすぎず（単なる意味のない印にすぎず）、対象を指示するだけで、指示機能以外の言語機能を何一つとして持たないものである。そして、Kripkeの基本的考えは、固有名に関連する性質に全く関係なしに（たとえ、固有名に関連して、さまざまな性質を連想したとしても、固有名によって指示する上で、何の関わりも持たない）、社会で一般的に行なわれている固有名による指示と一致する形で、人々がその固有名によって同一の指示を行ない、そのようにして社会から固有名の使い方を習得し、従って固有名の指示に関して受け継ぎ、伝えられてくる伝達の連鎖（a chain of communication）が固有名の指示を真に決定するということである。つまり、固有名の指示を決定するのは、固有名に関連する性質ではなく、伝達の因果連鎖であり、その意味で、言語習得に必要なものは、指示の保持である。そうした考えが、Millの考えとうまく一致するとされている。結局、両者は、固有名に関連する性質（あるいは、指示される対象に関する性質）に関係しなくても、意味（sense）の介入を必要としなくても、記述機能を持たなくても、固有名の指示が可能であるとする点で、共通している。それは、図表Iと図表IVの右側の存在を否定し、左側だけの直接的な指示を意味する。

“Naming and Necessity”の中で、記述理論（とくに、Searleの記述理論）をかなり詳細に批判しながら、「伝達の因果連鎖」(a causal chain of communication)という概念の果たす役割の重要性を強調する。最初に、記述理論の主張を次のような命題に細分化し、その一つ一つを具体例を挙げながら批判していく。

- (1) To every name or designating expression “X,” there corresponds a cluster of properties, namely the family of those properties φ such that A believes “ φ X.”
- (2) One of the properties, or some conjointly, are believed by A to pick out some individual uniquely.
- (3) If most, or a weighted most, of the φ 's are satisfied by one unique object y, then y is the referent of “X.”
- (4) If the vote yields no unique object, “X” does not refer.
- (5) The statement, “If X exists, then X has most of the φ 's” is known a priori by the speaker.
- (6) The statement, “If X exists, then X has most of the φ 's” expresses a necessary truth (in the idiolect of the speaker).⁵⁷⁾

幾つかの具体例を見てみることにする。命題(2)を否定する例として、次の具体例を挙げる。
((1)は、定義であるとされている)。

Consider Richard Feynman, to whom many of us are able to refer. He is a leading contemporary theoretical physicist. Everyone *here* (I'm sure!) can state the contents of one of Feynman's theories so as to differentiate him from Gell-Mann. However, the man in the street, not possessing these

abilities, may still use the name “Feynman.” When asked he will say: well he’s a physicist or something. He may not think that this picks out anyone uniquely. I still think he uses the name “Feynman” as a name for Feynman.⁵⁸⁾

命題(2)によれば、対象の性質の内、一つ（あるいは、幾つか組み合わさって）が分かれば、他のものからはっきり区別して、その対象を見分けられることになる。しかし、Feynmanの例が示すように、一般の人たちは（専門家ならば、Feynmanの理論の内容について知っているであろうから、例えば、Gell-MannからFeynmanをはっきりと区別できるであろう）、Feynmanについてほとんど知らないか、知っていても、彼が物理学者であること位で、それによってFeynmanを他の人からはっきり区別して見分けられるとは思わないであろう（「彼は、物理学者である。」は、Feynmanだけでなく、他の人にも言えることであるから）。それでも、“Feynman”という名前を使用して、Feynmanという人物を指示することができるのである。つまり、Feynmanについて、彼が物理学者であること位しか知らなくても、それによって他の人たちからはっきり区別できなくても、固有名の指示は可能で、Feynmanという人物の名前として“Feynman”という名前を使用するのである。簡単に言えば、Feynmanの例は、対象の性質に関係なく、固有名の指示が可能であることを示している。

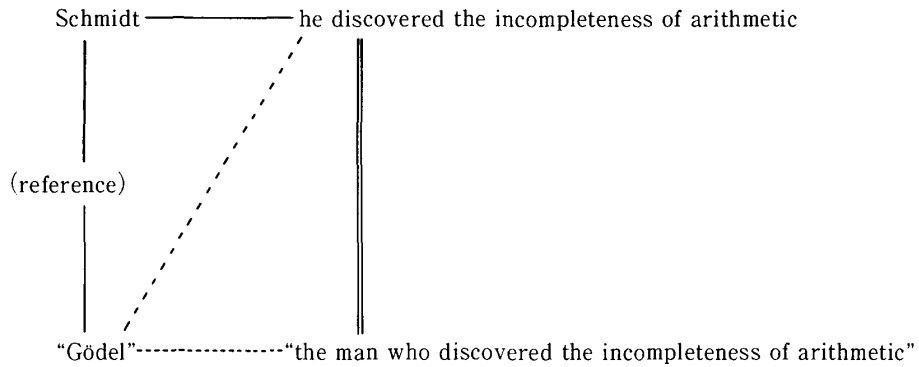
命題(3)を否定する例として、次の具体例を挙げる。

In the case of Gödel that’s practically the only thing many people have heard about him—that he discovered the incompleteness of arithmetic. Does it follow that whoever discovered the incompleteness of arithmetic is the referent of “Gödel”? Imagine the following blatantly fictional situation. (I hope Professor Gödel is not present.) Suppose that Gödel was not in fact the author of this theorem. A man named “Schmidt,” whose body was found in Vienna under mysterious circumstances many years ago, actually did the work in question. His friend Gödel somehow got hold of the manuscript and it was thereafter attributed to Gödel. On the view in question, then, when our ordinary man uses the name “Gödel,” he really means to refer to Schmidt, because Schmidt is the unique person satisfying the description, “the man who discovered the incompleteness of arithmetic.” . . . since the man who discovered the incompleteness of arithmetic is in fact Schmidt, we, when we talk about “Gödel,” are in fact always referring to Schmidt. But it seems to me that we are not. We simply are not.⁵⁹⁾

命題(3)によると、ある対象は、固有名に関連する一群の性質の中の重要なものをほとんど満足させることにより、その固有名の指示物になるということである。しかし、Gödel—Schmidtの例は、そうではないことを示す。例えば、Gödelについて人々の知っていることが、不完全性定理を発見したことだけだとし、そして不完全性定理を発見したのが、実はGödelではなく、“Schmidt”という名前の人物であったとする。もし命題(3)に従うとすれば、名前“Gödel”に関連

する確定記述 “the man who discovered the incompleteness of arithmetic” を満足させるのは、Schmidt という人物であって、Gödel ではないことになる。そうであるとすれば、人々が名前 “Gödel” を使用して、Gödel について話しているのに、彼らが指示しているのは、実際は Schmidt であるということになってしまう。そのことを記述理論の図表に入れると、次のようになる。

図表V：Gödel—Schmidt の例



図表Vにおいて、名前 “Gödel” の指示物は、本来 Gödel であるはずなのに、名前 “Gödel” に関連する確定記述 “the man who discovered the incompleteness of arithmetic” (性質：he discovered the incompleteness of arithmetic) を満足させるのが Schmidt である為、名前 “Gödel” の指示物が Schmidt になってしまうということが示される。そうした食違いは、図表Vの構成そのもの（各構成要素の存在価値、各構成要素間の関わり方など）に問題があることを結果的に表すことになる。その問題をどのように処理するかについては、Searle 的思考方をすると、Gödel—Schmidt の例を指示の不可能性を示す例として捉えていくしかないであろう。あえて指示の可能性を主張すると、名前 “Gödel” によって Schmidt を指示するということになってしまうからである。Kripke にとっては、Gödel—Schmidt の例は、性質あるいは確定記述の介入の不必要性を示すものであり、それらに関係なく、固有名の指示が可能であること（名前 “Gödel” によって Gödel を指示すること）を示すものであり、従って、図表Vの否定につながっていくことになる。

以上の二例を含めて、多くの具体例を検討・批判することによって、Kripke は、記述理論に潜む矛盾を指摘していく。そうした過程を通して、性質あるいは確定記述に関係なく、つまり意味 (sense) の介入を必要とせずに、固有名の指示が可能であるという結論に達していく。そして、記述理論の矛盾は、単に表面的なものではなく、根本に関わるものとしている。というのは、すでに3で述べたように、性質あるいは確定記述が固有名と何らかの形で関わっているとするのが、記述理論 (Frege にしろ、Searle にしろ) の大前提であった訳で、その大前提そのものを否定するからである。

根本的な問題は、対象をはっきりと見分ける (同定する) ことの難しさから生じると言えよう。例えば、親しい友人であっても、他の人からはっきりと区別して、友人を見分ける為には、どの

ような条件が必要であるかと聞かれても、簡単には答えられないであろう。友人の性格、肉体的特徴、職業、その他のことを一つ一つ挙げていっても、どれも友人を見分けるための必要十分条件にはなりえないであろう。その一つ一つが、他の人にも言えることであろうから。ところが、ほとんど問題なく（変装や双子などでない限り）、私たちは日常的に友人をきちんと見分けているのである。そうした問題に気付いていたからこそ、Searle は、Frege より一歩先に進めて、「群れ」概念を導入したと言え、また同様に、Kripke は、Searle より更に一歩先に進めて、性質あるいは確定記述との関わりを否定したと言える。ただ、Searle の「群れ」概念に関して、必ずしも正確に、あるいは正当に評価されているとは言えないように思われる。それは、一つには、Frege=Searle として混同した形で記述理論が捉えられているからであろう。「群れ」概念導入の本来の意味は、前述した $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ が、正に今述べた問題に対する一つの解釈策として提示されたという点にあると考えられる。

次は、伝達の因果連鎖についてである。

Someone, let's say, a baby, is born; his parents call him by a certain name. They talk about him to their friends. Other people meet him. Through various sorts of talk the name is spread from link to link as if by a chain. A speaker who is on the far end of this chain, who has heard about, say Richard Feynman, in the marketplace or elsewhere, may be referring to Richard Feynman even though he can't remember from whom he first heard of Feynman or from whom he ever heard of Feynman. He knows that Feynman is a famous physicist. A certain passage of communication reaching ultimately to the man himself does reach the speaker. He then is referring to Feynman even though he can't identify him uniquely. He doesn't know what a Feynman diagram is, he doesn't know what the Feynman theory of pair production and annihilation is. Not only that: he'd have trouble distinguishing between Gell-Mann and Feynman. So he doesn't have to know these things, but, instead, a chain of communication going back to Feynman himself has been established, by virtue of his membership in a community which passed the name on from link to link, not by a ceremony that he makes in private in his study: "By 'Feynman' I shall mean the man who did such and such and such and such." . . . On our view, it is not how the speaker thinks he got the reference, but the actual chain of communication, which is relevant.⁽⁶⁰⁾

In general our reference depends not just on what we think ourselves, but on other people in the community, the history of how the name reached one, and things like that. It is by following such a history that one gets to the reference. . . .

A rough statement of a theory might be the following: An initial "baptism" takes place. Here the object may be named by ostension, or the reference of the name may be fixed by a description. When the name is "passed from link to link," the receiver of the name must, I think, intend when

he learns it to use it with the same reference as the man from whom he heard it. If I hear the name “Napoleon” and decide it would be a nice name for my pet aardvark, I do not satisfy this condition.⁶¹⁾

Kripke の言葉から分かるように、伝達の因果連鎖は、次のように説明される。まず最初に、命名 (baptism: 人間を含む全ての場合) が行なわれる。その名前をある人たちが聞き、そして別の人たちが聞き、そしてまた別の人たちが聞き、そしてまた別の人たちが聞くという具合に、鎖がつながったように、次から次へとその名前が広がっていき、次から次へとその名前が受け継がれていく。そのような人から人へと受け継がれていく伝達の因果連鎖の中で、名前を聞いた相手の人がその名前によってある特定の対象を指示するのと同じ形で、名前を聞いた本人がその同一の名前によってその同一の対象を指示するという具合に、名前の使い方 (ある特定の名前が、ある特定の対象を指示すること) を習得し、それが人から人へと継承されていく。それは、命名された本人から現在その名前を使用する人まで続く、一本につながった一種の伝達の道のようなものである。そして、現在その名前によってその特定の対象を指示する時、誰から聞いたか忘れても、その名前と呼ばれる対象について何も知らなくても、その対象を他のものから区別できなくても、簡単に言えば、その対象をはっきりと見分けられなくても、その対象を正確に指示していることになる。というのは、以上のようなことが行なわれている社会の一員であるということだけで、その伝達の因果連鎖の中にいることになり、その伝達の因果連鎖によってその名前の指示が決定されるからである。

そのような伝達の因果連鎖は、話し手の内的心理に関わりを持つことなしに (固有名に関連して、あるいは対象に関して、話し手が何を連想し、何を考えるかは、たとえあったとしても、固有名の指示には関係がない為)、固有名の指示を決定するものであるということになり、従って固有名と対象の因果関係に基づき、直接的な指示を示すことになる。ただ、最初の命名の時だけ、確定記述によって固有名の指示が決定されることがあるとしており、その意味で、記述理論が主に適用できるのは、もしできるとするならば、最初の命名の場合だけということになる⁶²⁾。その点に関しては、賛否両論が出されるところである。例えば、最初の固有名の使用 (最初の命名) とそれ以降の使用とが因果的につながっているだけでなく、最初の使用の時までも、因果的な結びつきがあるとして、一貫した因果理論を主張するのが、Devitt の *Designation* である。

上記の伝達の因果連鎖に関する説明から理解できるように、Kripke の因果理論には、少なくとも三つの特徴があると言える。第一は、最初の固有名の使用 (最初の命名) とそれ以降の使用を因果的に結び付ける、いわゆる「タテ」の因果関係に重心が置かれていることである。その為、固有名—話し手—対象の因果関係は、「タテ」の因果関係として説明されることになる。それに対して、いわゆる「ヨコ」の因果関係に重心を置くことを主張する哲学者もいる。例えば、“The Causal Theory of Names” (1973) の中で⁶³⁾、対象と話し手の因果関係を主張する Kripke を

評価しながらも、最初に命名される対象と現在その名前を使用する話し手の間の因果関係のみに焦点を合わせることに反対し、むしろ対象の状態・行動と話し手が持つ情報の間にこそ重要な因果関係が存在すると Evans は強調する。勿論、どちらを取るかの問題ではなく、「タテ」と「ヨコ」の因果関係の相互関係として捉えていくことが、本来の姿であるが、現在の固有名の使用を説明するには、「ヨコ」の因果関係の解明が必要不可欠であることは、確かである。第二は、話し手の内的心理を除外することである（勿論、他の人たちと一致する形で、固有名を使おうとする意図はあるが）。というのは、固有名の指示は、話し手がどのように考えるかではなく、あくまでも固有名の使われ方の歴史と社会の他の人たちに依存する形で、決定されることになっているからである。その為に、実際の発話の場面で、固有名の使用によって指示する時、個々の話し手がどのような意図を持っているのかが無視されてしまう。その点に関して、Evans⁶⁴⁾は、固有名の指示の決定の際に、重要な役割を演じるのが話し手の意図であるとしている。第一の場合と関連して、「ヨコ」の因果関係の重要性を理解し、その意味を解明していけば、話し手の意図や固有名の使用を取り巻くコンテキスト（例えば、Wettstein⁶⁵⁾は、コンテキストを広い意味で解釈し、言語的のみならず、社会的・文化的なものまでも含める）との何らかの関わりが浮かび上がってくるであろう。第三は、固有名の使用の社会性・集団性である。というのは、固有名の指示は、個々の話し手によって決定されるのではなく、社会一般の言語慣習に従う（社会の他の人たちと一致する形で、個々の話し手が固有名による指示を行なう）からである。しかし、その点に関しては、Kripke 自身、それ程明確に強調しているとは言えないが、そうした要素があることは、事実である。それを強調するのが、Putnam である。Putnam は、Kripke の因果理論を受け入れ、最初の命名（Putnam は、Kripke の “baptism” の代わりに、“introducing event” を使用する）の時だけは、確定記述によって固有名の指示が決定されるが、それ以降の固有名の使用は、最初の使用と因果的に結び付いているとする。そして、Kripke の因果理論にとって重要なことは、固有名の使用が因果的であることではなく、その集団性にある⁶⁶⁾とし、社会における言語の分業（division of linguistic labor）という考えを導入する⁶⁷⁾。つまり、労働の分業と類似して、平均的な話し手は、固有名の指示を決定するのに必要なものを何一つとして持っておらず、ただ集団の一員として従うだけで、その集団の社会言語的状态が固有名の指示を決定することになり、従って個人の心理的状态が、固有名の指示を決定する際の要素にはなりえないことになる。ともかく、Evans にしても、Putnam にしても、「ヨコ」の因果関係を重要視しているという点で、共通していると言えるであろうが、Evans が話し手の意図の意義を強調するのに対して、Putnam がその意義を否定し、言語の分業という集団性・社会性を強調するのである。

ここで、Kripke の批判に対する Searle の反論を少し見ることにする。

Often, in fact, one does make what I called parasitic references using a proper name: often the only identifying description one associates with a name “N” is simply the “object called N in my com-

munity or by my interlocutors". In such a case, my use of the name is parasitic on other speakers' use of the name in the sense that my reference, using a name to which I can attach only the Intentional content "called N", is successful only if there are now or have been other people who use or have used the name "N" and attach a semantic or Intentional content of a completely different sort. . . . the "causal chain of communication" is simply a characterization of the parasitic cases seen from an external point of view.⁶⁸⁾

Searleによれば、固有名の寄生的指示とは、名前に関連して唯一考えられる内容が、単にある名前と呼ばれている（社会でそう呼ばれているか、相手がそう呼ぶか）というだけの場合で、他の人たちの使い方に寄生した形で、名前を使用するしかなく、それで名前の指示が可能となることである。つまり、名前"N"に関連する確定記述 "the object called N in my community or by my interlocutors" を満足させることにより、名前"N"がその対象を指示することになる。その寄生的指示の例によって、Kripkeの因果理論を処理することができ、従って記述理論で十分説明がつくとしている。そこで、興味深い点は、伝達の因果連鎖とは、外からの観点で見られた寄生的例の描写にすぎないものであるとしていることである。それは、同一の寄生的例が、記述理論の場合、人間の内的心理から描写されるのに対して、因果理論の場合、外界から描写されるにすぎないことを意味する。

$X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) \rightarrow$ 固有名の指示という式を使用して言えば、()内に、 x が一つもなければ、指示は不可能となるが、 x が一つでもあれば、可能となる訳で、そこで $X(x) \rightarrow$ 固有名の指示を寄生的指示の例とすれば、記述理論によって全て説明がつくことになる。その $X(x)$ 内の唯一の x が、"the object called N in my community or by my interlocutors"となる。それに対して、()内の x が一つもなければ、指示が不可能になるはずであるが、それでも指示は実際に可能であるから、 $X(x^0) \rightarrow$ 固有名の指示となり、結局 x に関係なく、指示が可能であるとするのが、Kripkeの論理である。そこで、単にある名前と呼ばれているということをどのように解釈すべきかが x になるのか、ならないのか、問題となる。 x になるとすれば、 $X(x) \rightarrow$ 固有名の指示となり、 x にならなければ、 $X(x^0) \rightarrow$ 固有名の指示となる。言い方を換えれば、対象が単にある名前と呼ばれているということは、人間の内的心理（名前に関連して、話し手が頭の中で考える性質あるいは確定記述）から捉えられれば、 $X(x) \rightarrow$ 固有名の指示となるが、外界（伝達の因果連鎖で受け継がれる名前による指示の仕方）から捉えられれば、 $X(x^0) \rightarrow$ 固有名の指示となる。もし以上の解釈が正しければ、Searleの記述理論にしても、Kripkeの因果理論にしても、共に $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) \rightarrow$ 固有名の指示という公式が適用できることになり、両者の言葉から受ける印象とは異なり、共通性があることになる。それを裏付けるものと思われるのは、Kripke自身、固有名に関連して、話し手がさまざまな性質あるいは確定記述を連想し、考えることを認めており、またSearleにしても、伝達の因果連鎖が実際に起きていることを認めており、ただ固有名

の指示を説明するのに、どちらが本質的であるかが、両者にとって食違うだけであるという事実である。更に、固有名には記述機能はなく、言語機能としてあるのは、指示機能だけであるという共通点もある。しかし、気を付けなければならないことは、固有名に関連する性質あるいは確定記述が一つしかない例を Kripke が使用することである。それは、Frege の $x \rightarrow$ 固有名の指示を意味してしまい、Searle の記述理論の批判には、必ずしも当てはめられるとは言えなくなってしまう。従って、Frege の記述理論と Searle の記述理論の相違を正確に捉えておくことが重要となるのである。

5. 最後に

固有名の指示に関して、歴史的背景、記述理論 (Frege と Searle)、因果理論 (Kripke) の順序で検討してきたが、最後に、Frege の記述理論、Searle の記述理論、そして Kripke の因果理論の相違を簡単に述べて、終えることにする。

固有名の指示と性質あるいは確定記述の関係について言えば、次のようになる。

[Frege] $x \rightarrow$ 固有名の指示

[Searle] $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) \rightarrow$ 固有名の指示 [寄生的指示の場合] $X(x) \rightarrow$ 固有名の指示

[Kripke] $X(x^0) \rightarrow$ 固有名の指示

固有名の指示を決定するのは、何であるのか。その質問に対する解答は、 x であり、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ であり、また $X(x^0)$ であったりする。そこに見られる食違いは、固有名の指示に対する捉え方の相違から生まれてくるものであるが、また一つの歴史的発展過程を表すものでもある。Mill と対立する形で、意味 (sense) の存在を認め、意味 (sense) と指示の区別の必要性を主張する Frege は、固有名の指示がある特定の、単一の性質あるいは確定記述によって決定されるとし、そこに潜む矛盾に気づき、それを取り除く為に、「群れ」概念を導入する Searle は、固有名の指示が一群の性質あるいは確定記述によって決定されるとし、更に Mill に立ち返って、意味 (sense) の関わりを否定する Kripke は、固有名の指示が伝達の因果連鎖によって決定されるとしているように。そこには、Frege より一步先に進めようとする Searle、そして Searle より更に一步先に進めようとする Kripke がいる。そうした発展過程が、上記の公式の中に見られる。例えば、 $x \Leftrightarrow X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) \Leftrightarrow X(x^0)$ の変化は、さまざまある固有名の指示をより包括的に説明しようとする試みの現れを示すものである。 x と固有名の関係を最も基本的と思われる一対一の関係として捉え、それによって全てを説明しようとする試み、それが失敗すると、 x を拡大し、 X 対一の関係によって全てを内包させようとする試み、それに矛盾を感じると、今度は逆に、 x^0 (ある意味では、 x を無限大にする作用がある) にして、 x から解放されることによって全てを説明しようとする試みという具合に。

しかし、発展することは、必ずしも質的向上を意味するとはかぎらない。その評価はともかく

として、上記の公式だけを見る限り、固有名の指示を包括的に説明する為の一つの手段としては、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) \rightarrow$ 固有名の指示という公式 (Searle の記述理論から切り離して、あくまでも公式として見る) が便利であると言えよう。というのは、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n)$ は、() 内の x が一つだけならば、 $X(x)$ となり、しかもそれが全ての場合に当てはまり、恒常的であれば、 x と言い換えられるし、また () 内の x が一つもなければ、 $X(x^0)$ となり、それによって x からの解放を表すことができ、しかもそれが恒常的であっても、 x に全く関わりがないことを表す上で、都合がよく、もし必要ならば、それを消去し、固有名の指示だけを残せばよいからである。ただ、 x との関わりが全くないことを示す必要があり、その意味では、 $X(x^0)$ とする方がいいであろう。そうであるとすれば、 $X(x^1, x^2, x^3, \dots, x^n) \rightarrow$ 固有名の指示という公式は、Frege の記述理論、Searle の記述理論、そして Kripke の因果理論のそれぞれの特徴を説明する上でも、またそれらの相違を簡単に、しかも明確に説明する上でも、便利であることは勿論、また重要でもあると言える。

(注)

- (1) David Kaplan, "Dthat", in A. P. Martinich (ed.) *The Philosophy of Language* (New York: Oxford University Press, 1990), p. 318. Originally published in Peter Cole (ed.) *Syntax and Semantics*, Volume 9 (New York: Academic Press, 1978), pp. 221—253.
- (2) Jerrold J. Katz, "The Neoclassical Theory of Reference", P. A. French, T. E. Uehling, Jr., H. K. Wettstein (eds.) *Contemporary Perspectives in the Philosophy of Language* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1979), p. 103.
- (3) John R. Searle, "Proper Names", in A. P. Martinich (ed.) *The Philosophy of Language*, pp. 273—277. Originally published in *Mind*, volume 67 (1958), pp. 166—173.
- (4) Saul A. Kripke, "Naming and Necessity", in A. P. Martinich (ed.) *The Philosophy of Language*, pp. 278—294. Originally published in D. Davidson and G. Harman (eds.) *Semantics of Natural Language* (Dordrecht: Reidel, 1972), pp. 253—355.
- (5) John R. Searle, "The Problem of Proper Names", in D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits (eds.) *Semantics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1971), pp. 134—141. Originally published in J. R. Searle, *Speech Acts* (Cambridge: Cambridge University Press, 1969), pp. 162—174.
- (6) Saul A. Kripke, "A Puzzle about Belief", in A. Margalit (ed.) *Meaning and Use* (Dordrecht: Reidel, 1979), pp. 239—283.
- (7) John R. Searle, "Proper Names and Intentionality", in A. P. Martinich (ed.) *The Philosophy of Language*, pp. 330—346. Originally published in J. R. Searle, *Intentionality* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), pp. 231—261.
- (8) Rod Bertolet, *What Is Said* (Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1990), p. 99.
- (9) Jerrold J. Katz, *ibid.*, p. 103, p. 122.
- (10) Gottlob Frege, "On Sense and Reference", in P. T. Geach and M. Black (eds.) *Translations from the Philosophical Writings of Gottlob Frege* (Oxford: Basil Blackwell, 1952), pp. 56—78. Originally published as "Über Sinn und Bedeutung" in *Zeitschrift für Philosophie und Philosophische Kritik*, 100 (1892), pp. 25—50.

- (11) Saul A. Kripke, *ibid.*, p. 271.
- (12) J. S. Mill, *A System of Logic* (London and Colchester, 1843), book I, chapter 2, section 5.
- (13) Jerrold J. Katz, *ibid.*, p. 103.
- (14) Howard K. Wettstein, “How to Bridge the Gap between Meaning and Reference” in S. Davis (ed.) *Pragmatics* (New York: Oxford University Press, 1991), p. 160. Originally published in *Synthese* 58 (1984), pp. 63—84.
- (15) Dennis W. Stampe, “Toward a Causal Theory of Linguistic Representation” in P. A. French, T. E. Uehling, Jr., H. K. Wettstein (eds.) *Contemporary Perspectives in the Philosophy of Language*, p. 81.
- (16) Keith S. Donnellan, “Necessity and Criteria” in *The Journal of Philosophy*, LIX, No. 22 (1962), pp. 647—658.
- (17) Keith S. Donnellan, “Proper Names and Identifying Descriptions” in *Synthese* 21 (1970), pp. 334—358.
- (18) Keith S. Donnellan, “Speaking of Nothing” in *The Philosophical Review* 83 (1974), pp. 3—32.
- (19) Keith S. Donnellan, “The Contingent A Priori and Rigid Designators” in *Contemporary Perspectives in the Philosophy of Language*, pp. 45—60. Originally published in *Midwest Studies in Philosophy* volume II (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1977).
- (20) Hilary Putnam, “Is Semantics Possible?” in H. Kiefer and M. Munitz (eds.) *Languages, Belief and Metaphysics*, volume I (New York: State University of New York Press, 1970).
- (21) Hilary Putnam, “Explanation and Reference” in H. Putnam, *Mind, Language and Reality: Philosophical Papers* volume 2 (Cambridge: Cambridge University Press, 1975), pp. 196—214. Originally published in G. Pearce and P. Maynard (eds.) *Conceptual Change* (Dordrecht: Reidel, 1973), pp. 199—221.
- (22) Hilary Putnam, “Meaning and Reference”, in A. P. Martinich (ed.) *The Philosophy of Language*, pp. 308—315. Originally published in *The Journal of Philosophy*, volume 70 (1973), pp. 699—711.
- (23) Michael Devitt, *Designation* (New York: Columbia University Press, 1981).
- (24) Rod Bertolet, *ibid.*, p. 90, p. 99.
- (25) Howard K. Wettstein, *ibid.*, p. 160, p. 169.
- (26) Gottlob Frege, *ibid.*, p. 57.
- (27) Gottlob Frege, *ibid.*, pp. 60—61.
- (28) Saul A. Kripke, *ibid.*, p. 271.
- (29) Gottlob Frege, *ibid.*, p. 58, footnote.
- (30) John R. Searle, “Proper Names and Intentionality”, p. 336.
- (31) John R. Searle, *ibid.*, p. 342.
- (32) John R. Searle, *ibid.*, p. 336.
- (33) John R. Searle, “The Problem of Proper Names”, p. 136.
- (34) John R. Searle, *ibid.*, p. 138.
- (35) John R. Searle, *Speech Acts*, pp. 157—158.
- (36) Saul A. Kripke, *ibid.*, p. 271.
- (37) Saul A. Kripke, *ibid.*, p. 240.
- (38) John R. Searle, “Proper Names and Intentionality”, p. 336.
- (39) Saul A. Kripke, *ibid.*, p. 274.
- (40) John R. Searle, “Proper Names”, p. 274.
- (41) John R. Searle, “The Problem of Proper Names”, p. 139.
- (42) John R. Searle, “Proper Names and Intentionality”, p. 330.
- (43) John R. Searle, “Proper Names”, p. 277.
- (44) John R. Searle, “Proper Names and Intentionality”, pp. 342—343.

- (45) John R. Searle, "The Problem of Proper Names", p. 140.
- (46) John R. Searle, *ibid.*, pp. 140—141.
- (47) John R. Searle, "Proper Names", p. 276.
- (48) John R. Searle, "The Problem of Proper Names", p. 138.
- (49) John R. Searle, "Proper Names and Intentionality", p. 331.
- (50) John R. Searle, *ibid.*, p. 331.
- (51) John R. Searle, *ibid.*, p. 335.
- (52) John R. Searle, *ibid.*, p. 336.
- (53) John R. Searle, *ibid.*, p. 345.
- (54) Saul A. Kripke, *ibid.*, p. 274.
- (55) Saul A. Kripke, *ibid.*, pp. 239—240.
- (56) Saul A. Kripke, *ibid.*, pp. 247—248.
- (57) Saul A. Kripke, "Naming and Necessity", p. 282.
- (58) Saul A. Kripke, *ibid.*, p. 285.
- (59) Saul A. Kripke, *ibid.*, p. 286.
- (60) Saul A. Kripke, *ibid.*, pp. 287—288.
- (61) Saul A. Kripke, *ibid.*, p. 289.
- (62) Saul A. Kripke, *ibid.*, pp. 292—293.
- (63) Gareth Evans, "The Causal Theory of Names" in A. P. Martinich (ed.) *The Philosophy of Language*, p. 301. Originally published in *Aristotelian Society: Supplementary Volume 47* (1973), pp. 187—208.
- (64) Gareth Evans, *ibid.*, pp. 300—301.
- (65) Howard K. Wettstein, *ibid.*, pp. 168—169.
- (66) Hilary Putnam, "Explanation and Reference", p. 200, p. 203.
- (67) Hilary Putnam, "Meaning and Reference", pp. 311—312.
- (68) John R. Searle, *ibid.*, pp. 336—337.